

博 多 11

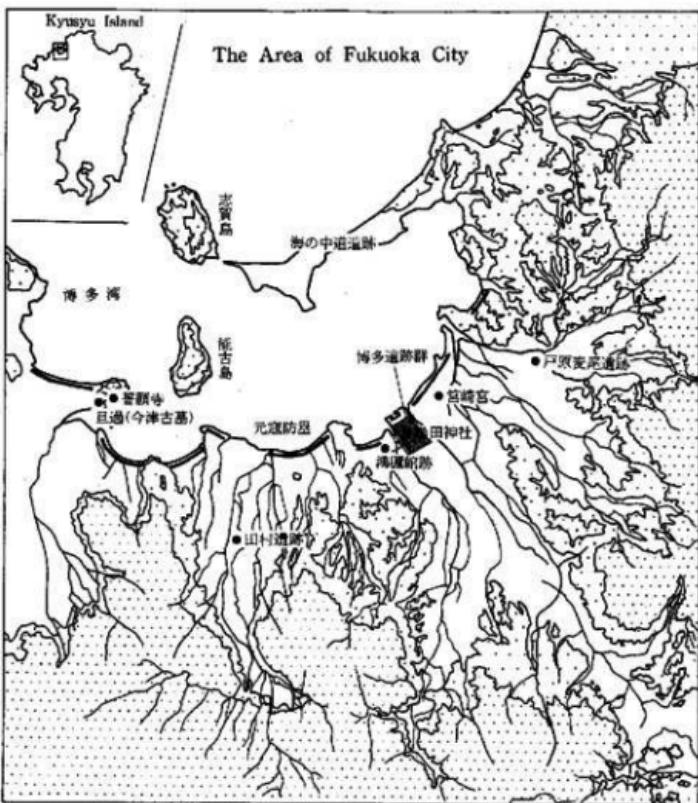
——博多遺跡群第33次調査報告——
福岡市埋蔵文化財調査報告書第176集

1988

福岡市教育委員会

博 多 11

——博多遺跡群第33次調査報告——
福岡市埋蔵文化財調査報告書第176集



博多遺跡群位置及び周辺中世遺跡

遺跡調査番号 8618
遺跡略号 HKT33

1988

福岡市教育委員会



SD-004 全 景



SD-004 内日本刀出土状況



日本刀鞘

序

現在、福岡都市圏の窓口として市街地の再開発が著しい
旧博多部は、古代から中世にかけて対外貿易の一大拠点と
して歴史の表舞台を飾った地域でもありました。

今回の調査でもそれを裏付けるように、古墳時代から中
・近世にわたるおびただしい遺構・遺物が検出されており、
とりわけ、調査区を横切る大溝の発見は、中世貿易都市「博
多」の富をめぐる争乱の歴史を物語るものでした。

本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、さらには学術研
究の場で活用されることを切に願っております。

調査に際し、御協力・御指導を賜わりました方々に心よ
り感謝の意を表します。

昭和63年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 善郎

例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が1987年度に実施した博多遺跡群第33次調査の遺構編である。
2. 本書で用いる方位は真北とした。
3. 本書に掲載した遺構番号はすべて通し番号であり、S C：堅穴住居・S D：溝・S E：井戸・S K：土壤・S R：土壤基の略号である。
4. 本書で用いる貿易陶磁分類は「博多出土貿易陶磁分類表」(福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ 博多(1) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集 別冊 1984年)に拠った。
5. 本書に掲載した遺構実測図は、下村・加藤の他、中橋孝博・田中良之(九州大学医学部)、沙崎美紀・陳雅文・宮崎由美子(西南学院大学々生)、小川泰樹・荻村昇二・本橋照代(明治大学々生)、黒田利夫による。
6. 本書に掲載した写真は、下村・加藤による。
7. 付編(1)の出土人骨については九州大学医学部解剖第2講座・中橋孝博講師に、付編(2)の出土馬骨については鹿児島大学農学部家畜解剖学教室 西中川駿助教授にお願いした。
8. 本書の執筆・編集は下村の協力を得て加藤が行なった。
9. 本書に関する遺物・記録類(写真・スライド・図面等)は、整理終了後福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理される予定である。

本文目次

I.	調査に到る経緯	1
1.	調査に致る経過	1
2.	調査の組織	1
3.	調査経過	2
II.	博多遺跡群第33次調査の概要	3
1.	遺跡の位置と環境	3
2.	調査の概要	7
(1)	古墳～古代の遺構	13
(2)	古代末～中世の遺構	18
(3)	近世・近代の遺構	27
III.	まとめ	30
付録	(1)博多遺跡群第33次調査出土の中世人骨	32
	(2)博多遺跡群第33次調査出土の馬骨について	35

挿図目次

図1	調査前風景	2
図2	筑前福岡城石垣書請下絵図	3
図3	博多遺跡群調査区位置図 (1/10000)	4
図4	福博古岡 (三奈木黒田家蔵)	5
図5	33次調査区の位置 (1/1000)	6
図6	調査区第1面全体図 (1/200)	9
図7	調査区第2面全体図 (1/200)	10
図8	調査区第3面全体図 (1/200)	11
図9	調査区第1面全景	12
図10	調査区第2面全景	12
図11	調査区第3面全景	13
図12	S C - 153実測図 (1/60)	14
図13	S C - 153	14
図14	S C - 154実測図 (1/60)	15
図15	S C - 154	15
図16	S C - 161実測図 (1/60)	15
図17	S C - 161	15
図18	S E - 142実測図 (1/60)	16
図19	S E - 142	16
図20	S K - 158実測図 (1/60)	16
図21	S K - 158	16
図22	S K - 148実測図 (1/60)	16

図23 SK-148	16
図24 SK-140実測図(1/40)	17
図25 SK-140	17
図26 SD-004地形図(1/180)	17
図27 SD-004土層図(1/100)	17
図28 SD-004土層断面	19
図29 SR-103実測図(1/30)	20
図30 SR-103	20
図31 SR-120実測図(1/30)	20
図32 SR-120	20
図33 SR-107実測図(1/30)	20
図34 SR-107	20
図35 SR-121実測図(1/30)	21
図36 SR-121	21
図37 SR-141実測図(1/30)	21
図38 SR-141	21
図39 SR-119	21
図40 SR-119実測図(1/30)	21
図41 SD-004・3層内馬骨出土状況(1/20)	22
図42 3層内馬骨出土状況	22
図43 SD-004内日本刀出土状況(1/40)	23
図44 日本刀出土状況	23
図45 日本刀一大刀・腰刀	23
図46 日本刀一小刀	23
図47 SE-115実測図(1/40)	24
図48 SE-115	24
図49 SE-166実測図(1/40)	25
図50 SE-166	25
図51 SE-166井筒内	25
図52 SK-089実測図(1/40)	26
図53 SK-089	26
図54 SK-009実測図(1/30)	26
図55 SK-009	26
図56 SK-005実測図(1/30)	27
図57 SK-005	27
図58 イギリス白磁出土状況	27
図59 イギリス白磁蓋印	27
図60 SK-015実測図(1/40)	28
図61 SK-015内船	28
図62 垂櫓実測図(1/40)	29
図63 垂櫓	29
図64 SE-034実測図(1/40)	29
図65 SE-034	29
図66 博多3次・33次大溝位置(1/4000)	30
図67 福岡市全國(1/10000)	31

表 目 次

表1 博多遺跡群調査地点一覧	8
表2 遺構一覧表	38

I. 調査に到る経緯

1. 調査に到る経緯

明治22(1889)年、旧国鉄博多駅開設以後九州の玄関口として発展してきた駅周辺地域は、昭和50(1975)年の新幹線乗り入れ、昭和58(1983)年福岡市高速鉄道(地下鉄)開通以後さらに重要度を増し、現在高層建築・道路整備による再開発のラッシュである。

当該地は古来より大陸文化の受入口として栄えてきた地域であり、多くの文化遺産が埋蔵され研究者からも常に注目されてきた地域である。したがってこれを受けての民間開発に伴う緊急発掘調査も昭和62(1987)年度現在で37次にわたって行われている。

今回の調査は昭和60(1985)年6月17日、株式会社三井不動産より、博多区祇園町8番地他内におけるビル建設申請が教育委員会埋蔵文化財課になされたことに始まる。埋蔵文化財課では当該地が博多遺跡群内であること、隣接の地下鉄祇園出入口工区・博多25次調査区で追構が確認されることなどから埋蔵文化財の包蔵を予想、同年6月24日試掘調査を行ない、遺構・遺物の包蔵を確認した。埋蔵文化財課ではこの成果をもとに株式会社三井不動産との協議にはいり、61年7月25日より本調査を行う事となった。

対象面積：898m²

調査面積：776m²

調査期間：昭和61(1986)年7月25日～11月15日

2. 調査の組織

調査委託：株式会社三井不動産

調査主体：福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

埋蔵文化財課長 柳田純孝

庶務担当：飛高憲雄(第2係長)・松延好文

調査担当：下村 智・加藤良彦

調査・整理作業：高田マサエ・松尾君子・舎川春江・柴田常人・山本キクノ・坂田セイ子
村田敬子・門河弘子・大瀬良清子・近藤澄江・百武義隆・津川真千代・栗木和子・渋谷友代・
古賀美恵子・斎藤富子・高木正代・窪田慧・黒田和生・谷吉美・吉住シヅエ・満貴文・
奥園佳代子・青柳美紀・町居則子・小宮歩美・池田初美・村嶋里子・前田直子・国武真理子・
宮崎由美子・島田貴代・陳雅文・沙崎美紀・小川泰樹・荻村昇二・本橋照代・小城信子・
能美須賀子・増崎多佳子・木村厚子

なお、今回の調査にあたって、施主株式会社三井不動産、施工業者株式会社三井建設には多くの御理解と御協力を賜った。記して深く感謝申し上げる次第である。

3. 調査経過

- 1986年7月21日 業者による1次掘削及び矢板入開始
7月25日 2次掘削開始
7月28日 第1面遺構検出・掘削開始
8月9日 SD004確認トレンチ設定
9月5日 第1面全景写真撮影
9月11日 第2面遺構検出・掘削開始
9月26日 SD004内で土壌墓検出（人骨残存）
10月6日 SD004内で日本刀検出
10月9日 SD004内で馬脚骨検出
10月16日 土壌墓内人骨取上げ（九大医学部田中良之・中橋孝博）
10月18日 第2面全景写真撮影
10月22日 第3面遺構検出・掘削開始
10月23日 古墳・奈良時代竪穴住居検出
11月7日 第3面全景写真撮影
11月14日 遺構実測終了
11月15日 地形測量終了・現場撤収



図1 調査前風景

II. 博多遺跡群第33次調査の概要

1. 遺跡の位置と環境

博多遺跡群は、北を陸繩島である志賀島と海の中道、西を糸島半島・玄界島・能古島とによって囲まれた天然の良港である博多湾岸の南東部に位置する。

湾岸には、湾内を巡る左転廻流と、瑞穂寺川・塙見川・那珂川・多々良川などの諸河川の搬出する砂によって著しい古砂丘の発達が見られ、当遺跡群は那珂川の右岸に形成された「博多浜（櫛山浜・袖の浜）」・「沖（息）の浜」と称される二つの砂丘上に立地している。「博多浜」は弥生時代中期前葉の豪棺墓が営なされており、それ以前の形成である事が知られる。「沖の浜」は第5次調査地点で地表下4.5mの位置から砕石が出土しており、古代段階までは形成途上にあった比較的新しい砂丘であり、永仁元（1293）年成立の「蒙古襲来絵詞」下巻の詞書に「息の浜」の字句が伺がえ、弘安の役（1281年頃）には陸化していた様である。遺跡群は西を那珂川とその支流の博多川、東を中世末に開削されたと伝えられる石堂川、南を同じく石堂川開削以前に砂丘南辺を西流し那珂川に合流していた旧比恵川を改修したと伝えられる「房州堀」と、中世末には四方を水によって囲まれた地域である（図2・3）。

大陸と指呼の間にあるこの地は、江戸幕府の鎮国に至るまで常に对外交渉の表玄関としての役割を果たしてきた。弥生時代中期には豪棺墓群を成立させる集団となり、4世紀から5世紀初頭にかけては方形周溝墓群と70m級の前方後円墳（博多1号墳）を出現させるまでになっている。筑紫国造磐井の反乱後の536年那の津の官家の設置以後、奈良・平安時代には大宰府の要津・唯一の外港として軍事・外交の基幹をなし、平安後期から鎌倉前期にかけ居留唐人の「博多大唐街」の形



図2 筑前国福岡城石垣普請圖下絵図 明和2（1765）年（福岡市美術館蔵）

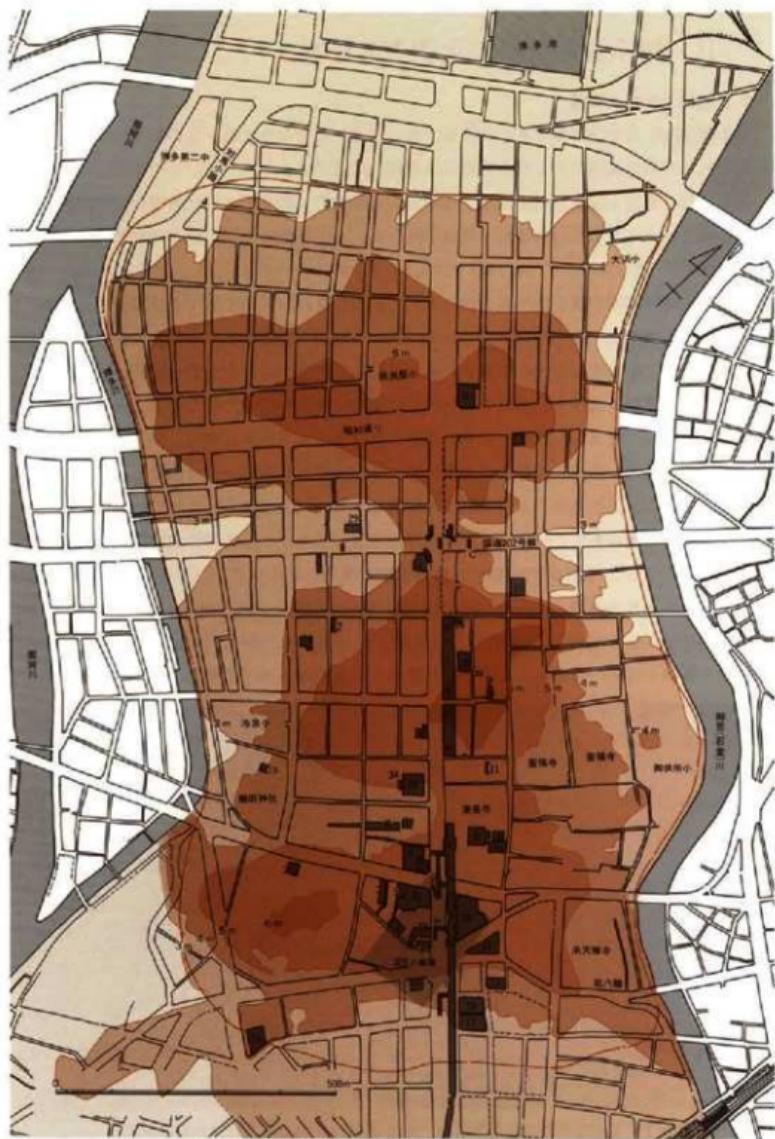


図3 博多遺跡群調査区位置図 (1/10000)

参考・アルカベーハ24街区(市立) (1/10000)

——博多遺跡群調査区

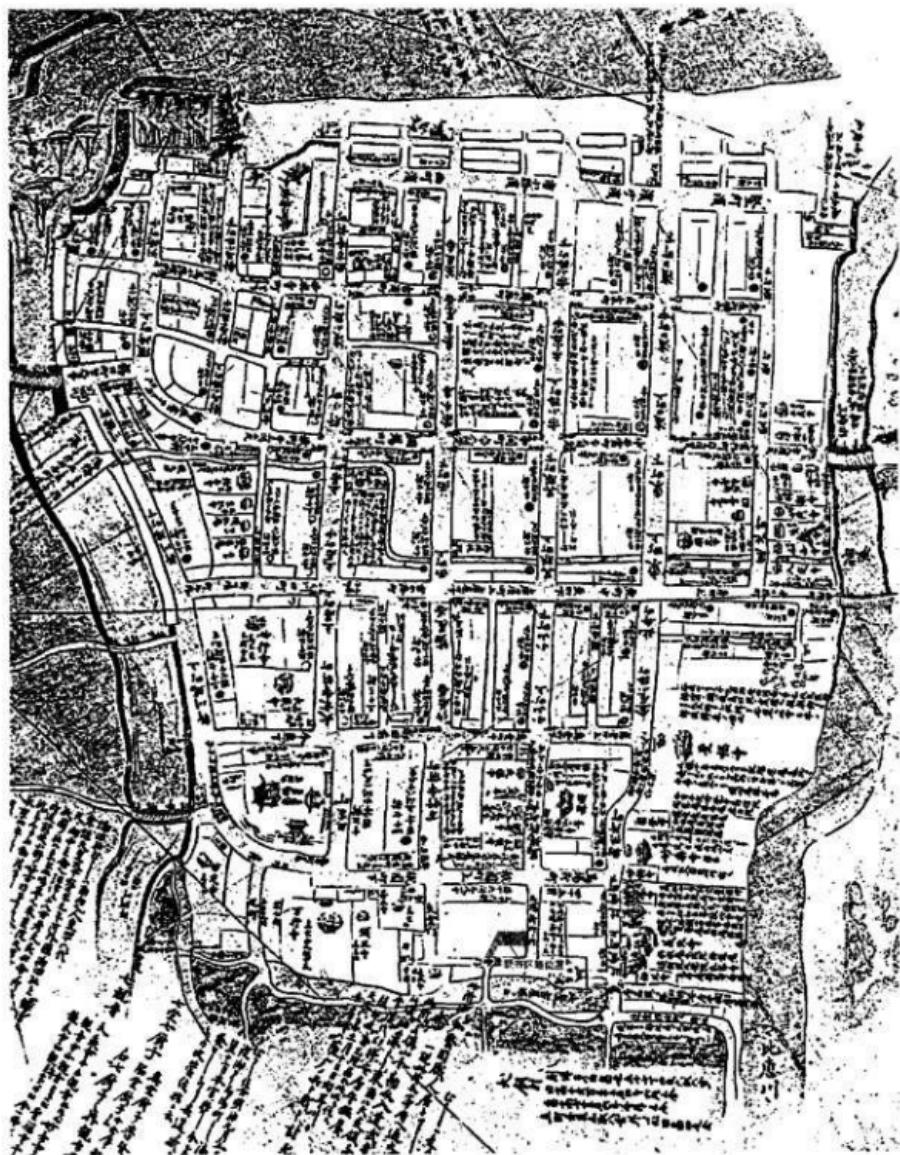


図4 江戸古図 文化9(1812)年(三奈木黒田家蔵)

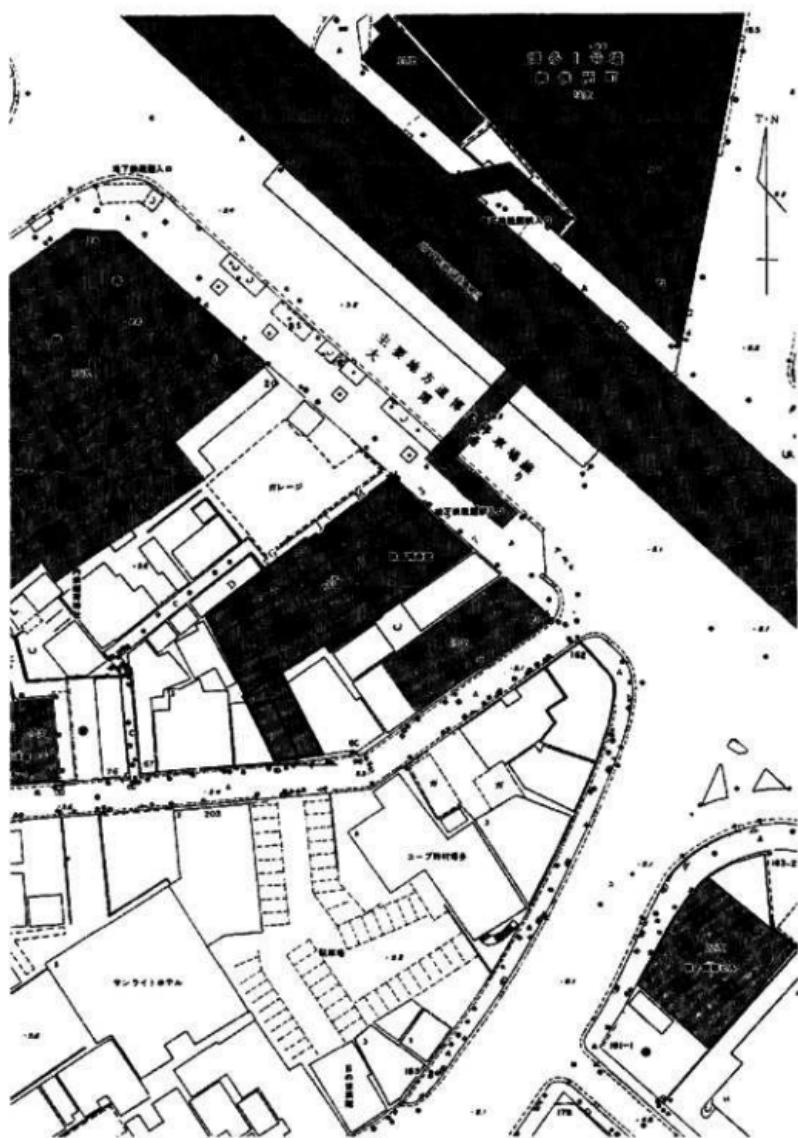


図5 33次調査区の位置 (1/1000)

成、平清盛による「袖の湊」の開削、聖福寺・承天寺・妙楽寺の建立、13世紀末の鎮西探題の設置、室町幕府の九州探題の設置・勘合貿易の開始と名実ともに九州の中心となる。しかし、半和裡の発展のみではなく、対外的には貞觀11(869)年新羅海賊侵寇・寛文2(1019)年刀伊の入寇・文永11(1274)年弘安4(1281)年の元寇、対内的には天慶3(940)年藤原純友の乱、元弘3(1333)年鎮西探題の滅亡、永錄2(1559)年大友・筑紫惣門の戦い、永祿12(1569)年・元龟2(1571)年大友・毛利の戦い、天正8(1574)年大友・龍造寺の戦い、天正(1583)年大友・島津の戦いと、この地の支配権をめぐって繁栄と戦乱を繰り返し、天正14(1586)年島津の焼き打ちによりことごとく焼き尽くされた。天正15(1587)年島津征伐に向かう太閤秀吉によって現町割に復興され、秀吉の恩寵とともに相俟って朝鮮山兵の兵站基地として往時の賑わいをとりもどすが、徳川幕府の鎖国により、國際貿易都市としての役割を長崎に譲り、「黄金の日々」に通かに及ばぬ一城下町・商業都市として明治を迎える。

2. 調査の概要

調査地点は「博多浜」砂丘の南部、東西方向に走る種線中央部から南に若干下がった、現地表高5.21mを測る地点である（図3・5）

調査は近現代の機乱と近世包含層を除去した地表下0.7~1.0m~標高4.0~4.3mの第1面、古墳~奈良時代の包含層である暗褐色砂質上面一標高3.8m前後の第2面、基盤層である黃白色砂上面~標高3.3~3.5mの第3面の計3面にわたって行なった。

検出した遺構は第3面での古墳時代布留式併行剖の住居・井戸・土壤を最古に中世末の大溝から第1面の近世・近代の瓦格井戸までのおびただしい量で、各遺構の切り合い関係も激しく、当地の活況を示す証左となっているが、このため遺物の混在も激しく、整理・検証を一層繁雑なものとしている。巻末の一覧表に出土遺物を記しているが、大部分の中世遺構に若干の近世遺物が、古墳・奈良期の遺構には中世遺物が混在しており、厳密な時期決定は極めて難かしい状況にある。

時期別には、古墳~平安期の遺構が22基、平安末~鎌倉期が96基、室町・戦国期が12基、近世・近代が38基となっており、平安末~鎌倉期が全体の57%を占め、ことに平安末~鎌倉初期間に82基と著しい集中を見せ、最盛期を示している。室町・戦国期は極端に減少し、井戸は一基も検出されておらず、生活面とは言い難い状況である。又、調査区を斜めに分断する16世紀代の掘削と考えられる大溝SD-004は現在までの調査例中最大規模であり、この有り様から該期には都市防衛の最前線地帯となっていた様である。SD-004は一部第1面で確認されたが、東半部で近世遺構の切り込みが著しく上端が不明確であったため、第2面で最終的に確認している。

出土遺物は弥生中期前半の甕棺片を最古に、釉裏紅壺・毛彫蓮花文高麗青磁碗・青白磁馬士壺等の希少品を含む多量の古代~中世貿易陶磁器を検出しているが、総量がコンテナボックスに80数箱と、博多遺跡群内としては少ない量である。

表1 博多遺跡群調査地点一覧（昭和63年3月現在）

公共事業関係

符号	調査番号	調査原因	所在地(博多区)	調査面積(m ²)	調査期間	備考
A	7 7 2 5	地下鉄建設	御供所町	1,412	77.12~78.11	西鉄線「博多駅~中洲駅」(1984)、『博多駅~中洲駅』(1984)
B	7 8 3 3	#	御供所町	4,500	79.3~12	祇園町工区「高速鉄道開発事業(3)」(1987)
C	7 8 3 5	#	店屋町・上野町	2,000	78.12~79.5	上野町工区
D	7 9 4 9	#	博多駅前一丁目	4,500	79.12~80.8	駅前工区
E	8 0 3 2	#	上野町	1,000	81.3	上野町換気塔
F	8 0 3 8	#	冷泉町・祇園町	4,350	80.10~12	祇園町2号出入口・高速鉄道開発事業(3) (1984)
G	8 1 4 8	#	御供所町	79	81.9	祇園町4号出入口
H	8 1 4 9	#	祇園町	1,840	81.10~11	祇園町5号出入口
I	8 1 5 0	#	祇園町・上野町	3,800	81.4~5	上野町出入口
J	8 4 3 5	#	博多駅前二丁目	2,150	84.4	祇園町P2出入口
K	8 2 2 4	道路拡幅	上野町	6,300	82.11~83.3	築堤段1次
L	8 3 3 1	#	#	5,640	84.2~9	築堤段2次
M	8 4 0 4	#	#	4,170	85.2~12	築堤段3次
N	8 5 2 7	#	御供所町	3,830	85.12~86.6	築堤段4次
O	8 6 5 3	#	#	3,860	86.10~87.2	築堤段5次

民間事業関係

次	調査番号	調査原因	所在地(博多区)	調査面積(m ²)	調査期間	備考
1	7 8 1 0	納分室建設	御供所町・東長寺境内	3,600	78.11~79.1	本調査
2	7 9 2 8	ビル建設	店屋町199	約1,000	79.4	安会・上野岡作成
3	7 9 2 9	納分室建設	祇園町・萬行寺境内	2,400	79.11	本調査
4	7 9 3 0	ビル建設	冷泉町7-1	1,1000	79.12~80.3	本調査(1981)、「博多II-同坂編」(1982)
5	7 9 3 1	#	下野屋町346	79.12		試掘調査地表下1.5mから縞石出土
6	7 9 3 2	#	冷泉町155地	5,400	80.3~4	本調査
7	8 0 2 3	#	祇園町189	2,100	80.6~8	本調査
8	8 0 2 4	本塁建設	御供所町・東長寺境内	6,000	80.8~10	本調査
9	8 0 2 5	ビル建設	上野町75	80.9		試掘坑丸
10	8 0 2 6	#	冷泉町474-9	56	80.12	本調査(1981)
11	8 0 2 7	#	御供所町3-30	80.12		試掘調査
12	8 1 2 7	#	中央通り152・153	81.6		試掘調査
13	8 1 2 8	#	祇園町1丁目121~127	81.7		トレンチ調査
14	8 1 2 9	#	店屋町4-15	2,550	81.8	本調査
15	8 1 3 0	駐車場建設	上野町569	1,000	81.8	試掘調査
16	8 1 3 1	ビル建設	店屋町246~248	1,500	81.9	本調査
17	8 1 3 2	#	駅前1丁目98	9,100	81.11	本調査(1985)
18	8 1 5 6	#	駅前2丁目8-14	82.1		試掘調査
19	8 3 2 3	社宅建設	柳川神社境内	2,000	83.4	本調査
20	8 3 2 4	ビル建設	駅前1丁目99	9,800	83.4	本調査(1985)
21	8 3 2 5	#	駅前1丁目18-1	1,500	83.5	本調査(1985)
22	8 3 2 7	#	冷泉町189地	8,400	83.9	本調査(1985)
23	8 3 3 4	空き地	鹿吉子町内	約3,000	84.2	小調査
24	8 4 3 3	ビル建設	冷泉町1-1	2,560	84.4~5	本調査
25	8 4 3 4	#	祇園町1-1	1,000	84.5~6	本調査(1985)
26	8 5 0 6	#	上長原町34	1,340	85.5~6	本調査(1986)
27	8 5 0 7	#	祇園町1-11	3,500	85.5~6	本調査(1986)「博多II-中州文化財報告書」(1987)に示す
28	8 5 0 8	#	御供所町70-2	1,8000	85.5~8	本調査(1987)
29	8 5 0 9	#	祇園町22-67	3,300	85.7~9	本調査(1987)
30	8 6 0 3	#	御供所町36-37・38-39	4,950	86.5~7	本調査(1987)
31	8 6 0 6	#	祇園町65-66	1,900	86.5~7	本調査(1987)
32	8 6 0 8	#	祇園町21-3	約1,0000	86.5~7	本調査
33	8 6 1 0	#	祇園町8地	7,760	86.7~11	本調査(1988)
34	8 6 4 5	#	冷泉町238-2地	40	86.10~11	本調査
35	8 6 4 8	#	上長原町56	6,550	86.11~87.5	本調査(1988)
36	8 7 2 5	#	祇園町42地	6,440	86.2~10	本調査
37	8 7 4 0	#	博多駅前1丁目129地	1,427	86.9~87.1	本調査

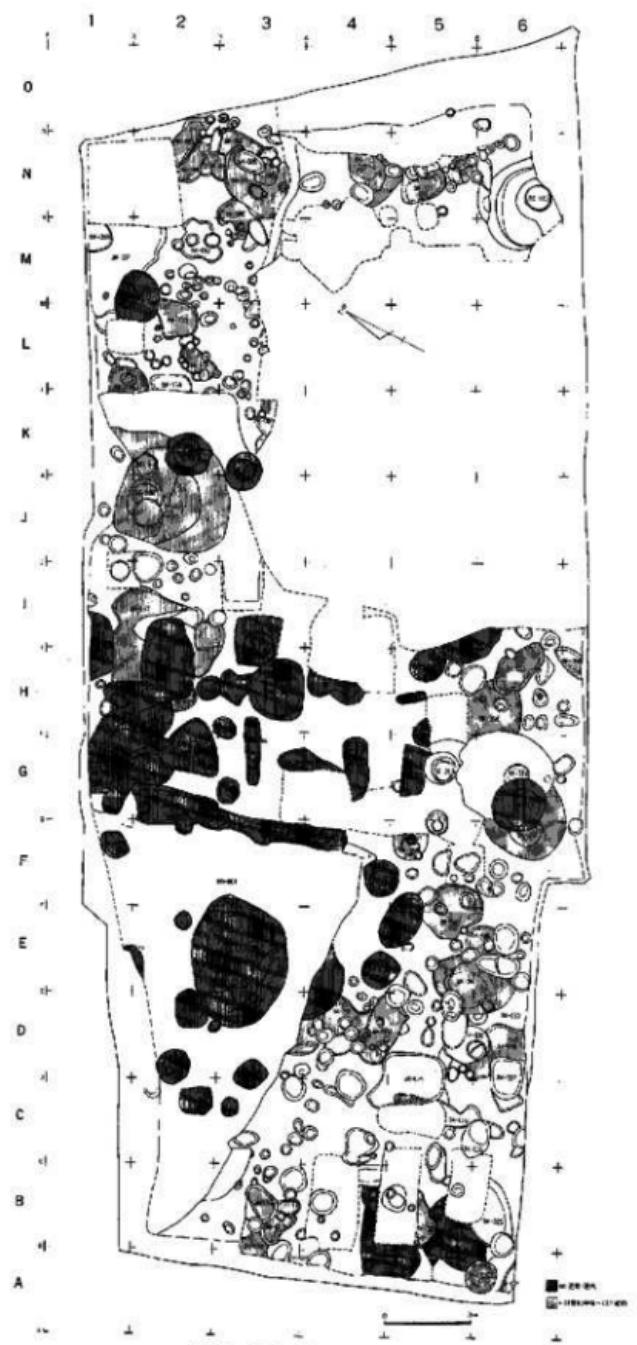


Figure 6 調査区第1面 全体図 (1/200)

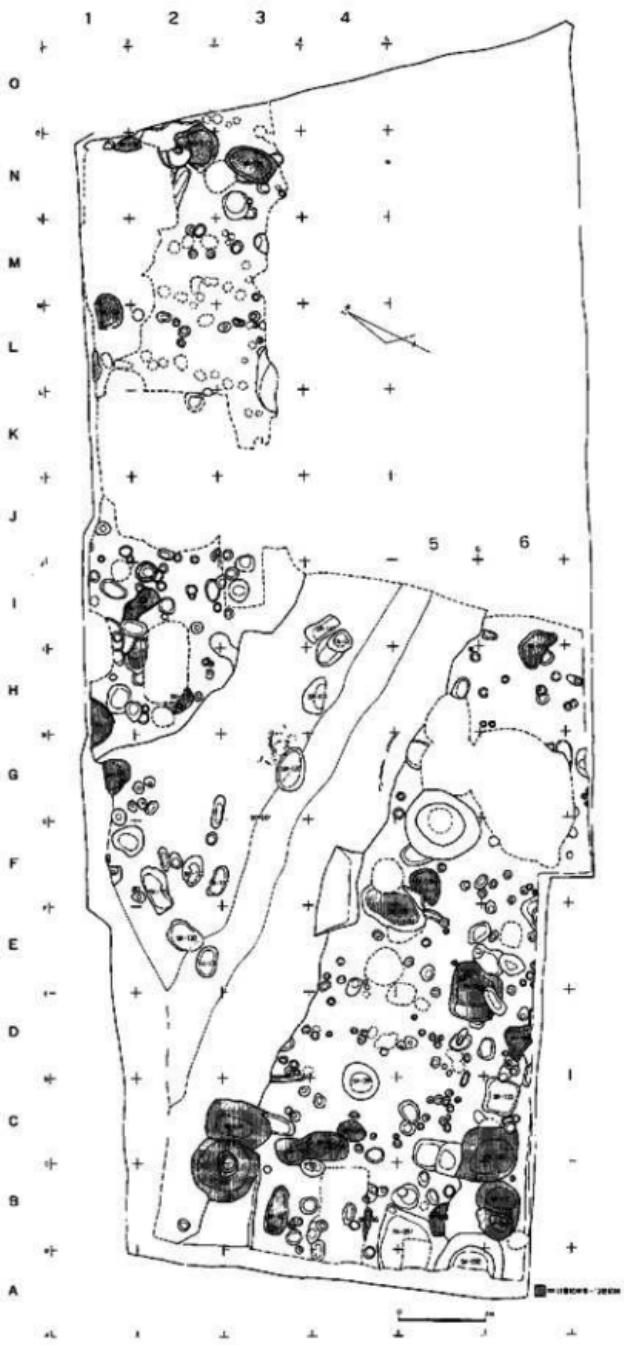


図7 調査区第2面 全体図 (1/200)

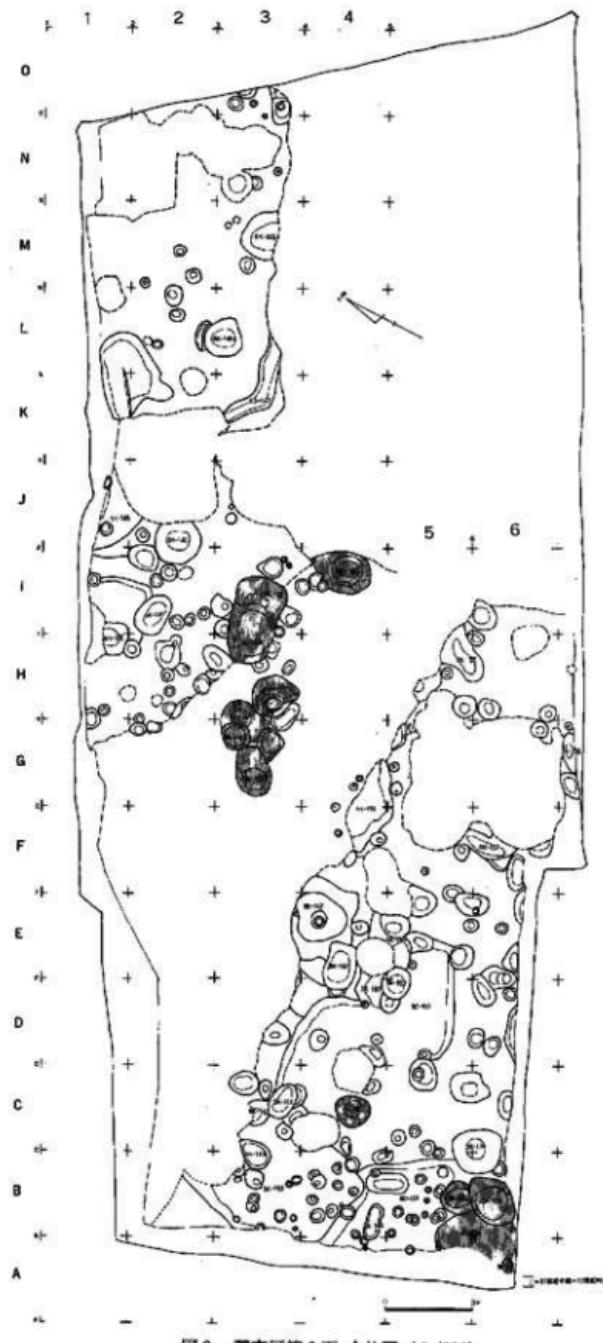


図8 調査区第3面 全体図 (1/200)



図9 調査区第1面全景（北東より）



図10 調査区第2面全景（北東より）



図11 調査区第3面全景（北東より）

(1) 古墳～古代の遺構

第3面の基盤層上で竪穴式住居3戸・井戸1基・土壙16基・溝1条を検出している。分布に偏りは無い。時期別には古墳時代布留式併行期が5基・5世紀代が1基・6世紀後半1基・7世紀後半代が3基、奈良期前半が4基・後半が4基、平安前期が2基であり、奈良時代に一つのピークを迎え、平安時代前期に一気に衰微する。

① 竪穴式住居 S C - 153・154・161の3戸を確認しており、他に S K - 148・158の2基の土壙も住居の可能性が考えられる。

S C - 153(図12・13)はB - 3～4グリッドに存し、長4.50m×幅3.56m×深3.56m×深0.55mを測る方形の竪穴式住居で、長軸をN - 16° - Eにとり、ほぼ南北方向に向く。後代の遺構に切られているため竈が残っていないが北に設けられていたと考えられる。柱は四柱式で柱間は2.65mを測かる。内部より、床面から10数cm浮いた状態でIV・VI期の須恵器・土師器と鉄鎌を1本検出している。時期は7世紀後半。

S C - 154(図14・15)はB - 4～5グリッドに存し、大部分を擾乱されているが一辺5.60mを測かる方形の竪穴式住居で、西側をS C - 153に切られる。長軸をN - 29° - Wの方向にとり、柱間は2.3mを測かる。炉址は確認していない。内部より、床面から浮いた状態で土師器高坏・器台・环等を検出している。時期は布留式併行期。

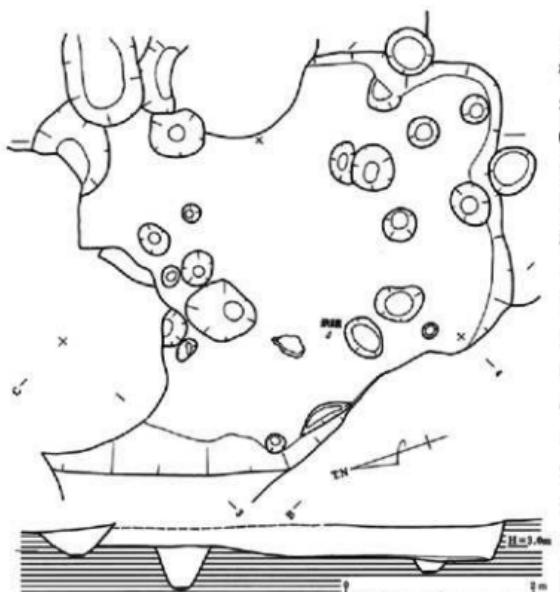


図12 SC-153実測図 (1/60)



図13 SC-153 (南東より)

SC-161(図16・17)はD～E-5グリッドに存する。同様に大部分擾乱を受けているが、長4.14m×短3.12m×深0.49mを測かる方形堅穴住居である。長軸をN-64°-Eにとり、柱間は3.8mを測かる。北側の長辺中央部に焼土が残っており、竈と考えられる。内部からはⅣ期の須恵器・土師器を検出しており、7世紀後半代と考えられる。

② 井戸 SE-142(図18・19)はE～F-4グリッドに存する。地盤が軟弱な砂のため井筒に比べて掘り方は異様に大きく、上端径4.58m・下端径1.74m・深1.2mの擂鉢状を成している。井筒はこの中央部にさらに径・深ともに約30cmの小穴を穿がち、曲物をすえている。最下段のみ木質が残っているが、上部まで数段重ねたものと思われる。井底で標高1.47mを測かる。掘方・井筒より布留式併行期の土師器甕・高坏等を検出しており、SC-154と同期と考えられる。

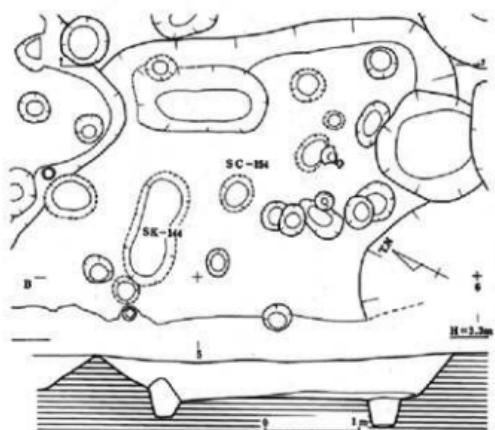


図14 SC-154実測図 (1/60)

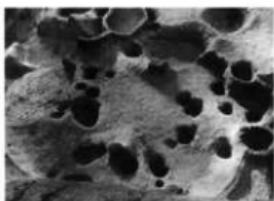


図15 SC-154 (南西より)

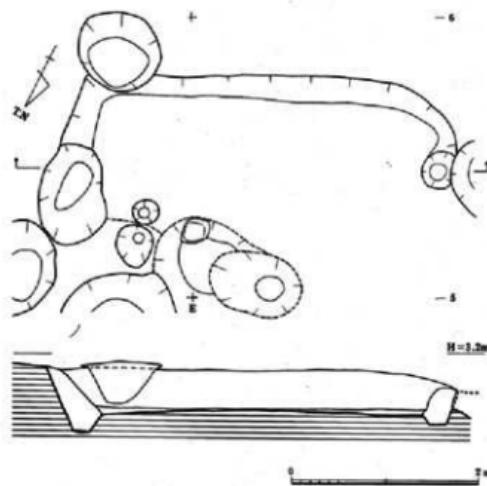


図16 SC-161実測図 (1/60)



図17 SC-161 (南東より)

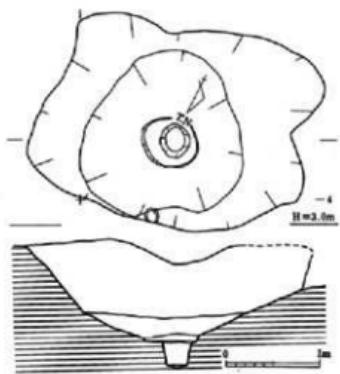


図18 SE-142実測図 (1/60)



図19 SE-142 (北西より)

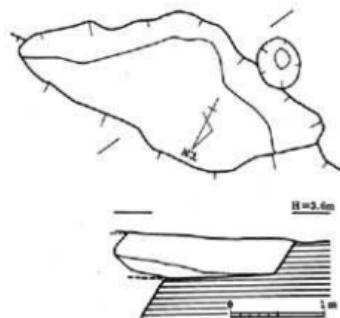


図20 SK-158実測図 (1/60)

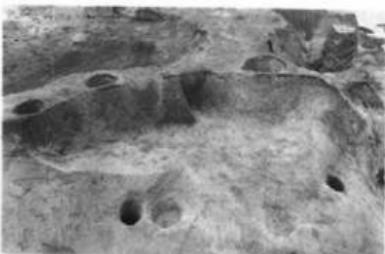


図21 SK-158 (北より)

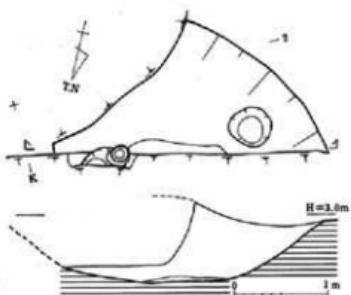


図22 SK-148実測図 (1/60)



図23 SK-148 (東より)

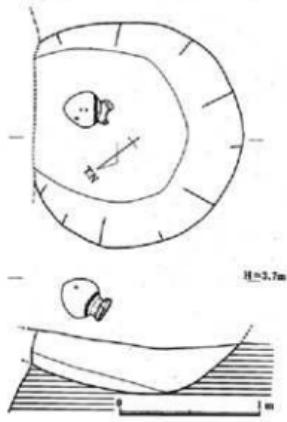


図24 SK-140実測図 (1/40)



図25 SK-140 (北東より)

③ 土壙 土壙は古墳時代布留式併行期で3基、5世紀代で1基、7世紀後半で1基、奈良前期半で4基、後半で4基、平安前期で2基確認している。大部分は廃棄物処理用のものと考えられる。

SK-158(図20・21)はF～G-4グリッドに存する。ほとんどをSD-004に切られているが残存部分で3.2m×1.6m×0.47mを測かる。方形の形状から住居址の可能性も考えられる。内部よりⅧ期の須恵器・土師器が出土しており、8世紀前半代が考えられる。

SK-148(図22・23)はJ-1グリッドに存し、擾乱と調査区外のため6分の1程度の検出であるが、残存部分で2.9m×1.42m×0.82mを測かる。内部より布留式併行期の土師器甕、高环等を検出している。

SK-140(図24・25)はI～J-2グリッドに存する。東端をSE-172に切られるが、長1.60m×幅1.50m×深0.43mを測かる円形の土壙である。内部からは床面から30～40cm程浮いた状態で布留式併行期の甕と、山陰系の二重口縁甕の完形品を検出している。甕は暗褐色砂質土の包含層中から検出されたが、同層中では土壙の上端が確認できず、結局基盤層まで掘り下げて漸く確認した。甕が宙に浮いてしまっているが、土壙上端は数10cm上方に有る。山陰系の甕は胴下半に穿孔がなされており、祭祠か墓の供獻品が流れ込んだものと考えられる。

(2) 古代末～中世の遺構

1～3面の全面にわたって検出しており、当調査区検出遺構の57%を占め、主体をなしている。殊に平安期末～鎌倉初期では81基の廃棄された遺構を検出しており、異様な集中度を示している。これが13世紀前半以降15基と減少し、さらに室町・戦国期には12基－このうち大溝と土塙墓を除いた日常生活関連の遺構は4基と激減し、当該期の井戸は1基も検出されていない。また、調査区を東西方向に斜断する形で検出された16世紀代の大溝S D-004は、最大幅9.8m・深さ2.7mを測かる堂々たるもの(巻頭図版1)で、博多遺跡群内調査例中最大規模のものである。調査区内でこの大溝と同時期のものは、北側に12m程離れた地点に土塙が1基(S K-061)があるのみで、居住空間とは言い難い状況を呈している。溝内には一時期土塙墓群が営なまれ、これらの有り様から、16世紀代には市街地のはずれ、都市防衛の最前線地帯にと変容している。

種別では、平安末～鎌倉初期で井戸12基・土塙70基、13世紀前半～14世紀前半で井戸4基・土塙11基、室町期で土塙2基、16世紀代で大溝1条・土塙墓6基・土塙3基を検出している。

① 大溝 S D-004(図26～28)

一部第1面で検出していたが、東半部が近世遺構の切り合いで上端が不明確であったため第2面で最終的に確認している。東端部分が現代の地下構造物で攪乱され欠失しているが、残存長27.3m・上端幅6.1～9.8m・下端幅0.8～1.7m・深さ2.7～2.5m・基底標高1.5mを測かる。主軸はN-92°-Eをとり、底面は西端が東端より20cm下がっており、水は東から西に流れていた様である。基盤が砂層のため崩れやすく、特に北西側は大きく崩れて幅9mを越えているが、東端部での上端幅6.1m・下端幅0.8m・深2.7mの逆台形の形状が本来の姿に近いと思われる。

層位(図27)は、1層—暗茶褐色砂質土で暗灰～暗褐色土のブロックを多く含む深さの6割方を占める客土層。2層—暗灰褐～暗褐色土の自然堆積層で比較的薄く部分的な堆積のため、遺構掘削時での分離ができず、1層土と同時に掘り上げている。3層—暗褐～黒灰色粘質土と黄灰色砂との互層からなる自然堆積層で大溝の改削後の堆積層である。4層—暗褐～黄灰色砂の自然堆積層で、5mm前後的小砾まで流れしており、かなり早い水流であったと思われる。溝内の土塙墓はこの上位より掘り込まれている。

出土遺物は、釉裏紅壺・青白磁馬上壺・翡翠釉碗等の希少品を包む多量の貿易陶磁が出土しており、7割以上を11・12世紀代の遺物が占める。しかし、最下層から1層まで、森田編年E群の白磁類(森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」貿易陶磁研究No.2 1982)、小野編年明染付B・C群(小野正敏「14～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」同上)、上田編年C II・B IV・B IV'類の青磁(上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」同上)、備前IV・V期の擂鉢・甕等の15・16世紀代を示す資料が少量だが万遍なく出土しており、上下間で時期差は認められず、16世紀代中に掘削・改削・整地されたと考えられる。

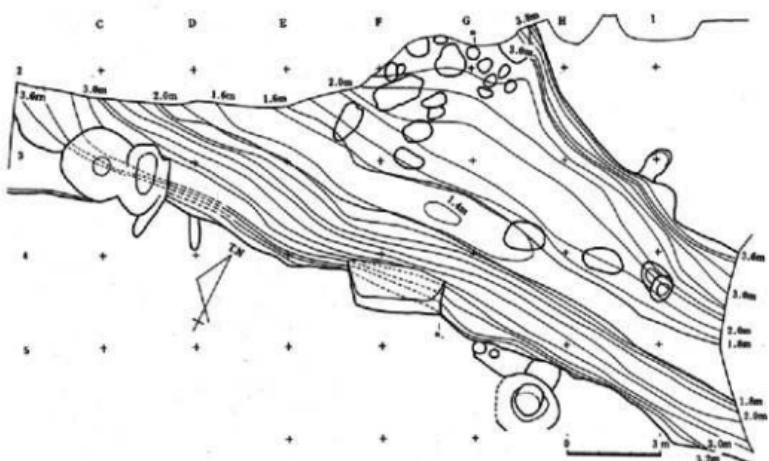


図26 SD-004地形図 (1/180)

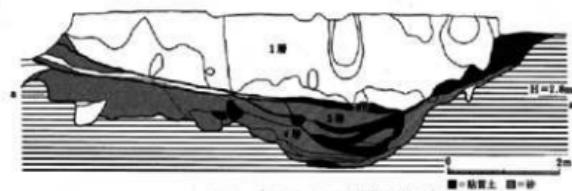


図27 SD-004土層図 (1/100)



図28 SD-004土層断面 (南西より)

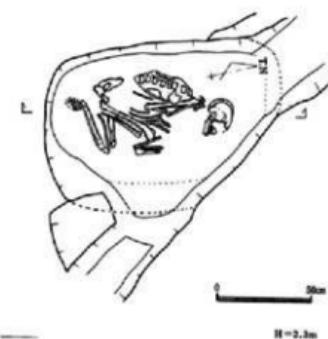


図29 SR-103実測図 (1/30)

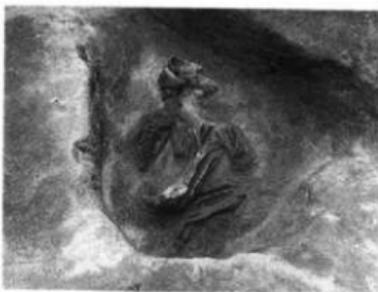


図30 SR-103 (南より)

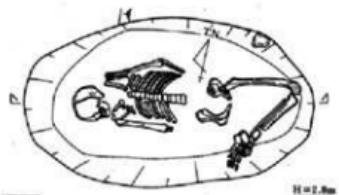


図31 SR-120実測図 (1/30)



図32 SR-120 (北より)

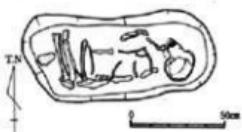


図33 SR-107実測図 (1/30)



図34 SR-107 (北より)

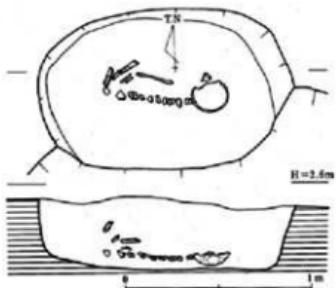


図35 SR-121実測図 (1/30)



図36 SR-121 (南より)

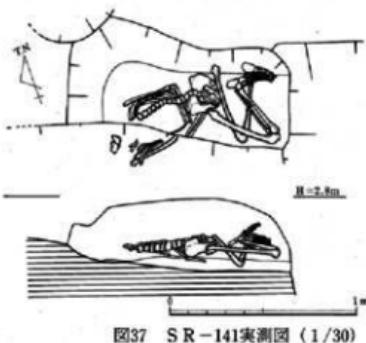


図37 SR-141実測図 (1/30)

土塙墓

SD-004内4層及び基盤層より6基の土塙墓を検出している。溝の主軸に沿ってほぼ一直線にならび、SR-103が頭位をこれに直交させる以外は皆、頭位も主軸に沿っている。

SR-103(図29・30-1号人骨)はE-2グリッドに存し、 $1.20 \times 0.74 \times 0.59$ m、基底標高1.62mを測かる不整円形の墓塙である。頭位をN-13°-Eにとり、被葬者は左側臥屈葬で、成～熟年の女性である。

SR-107(図33・34-2号人骨)はF-2グリッドに存し、 $1.11 \times 0.49 \times 0.22$ m、基底標高1.80mを測かる隅丸方形の墓塙。頭位をN-90°-Eにとる右側臥屈葬で被葬者は成年男性である。

SR-120(図31・32-3号人骨)はG-3グリッドに存し、 $1.51 \times 1.00 \times 1.15$ m・基底標高2.25mを測かる梢円形の墓塙で溝底から40～50cm上位の4層中に有る。頭位をN-102°-Wにとり、被葬者は仰臥屈葬の成年女性である。溝が改修された事を示す証左の一つとなったもので、右前腕の大半、右大腿・胫・腓骨を欠き、残存している右尺骨が上に立ち上がっていることから、



図38 SR-141 (南より)



図39 SR-119 (東より)

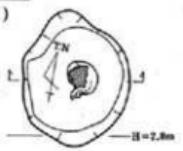


図40 SR-119実測図(1/30)

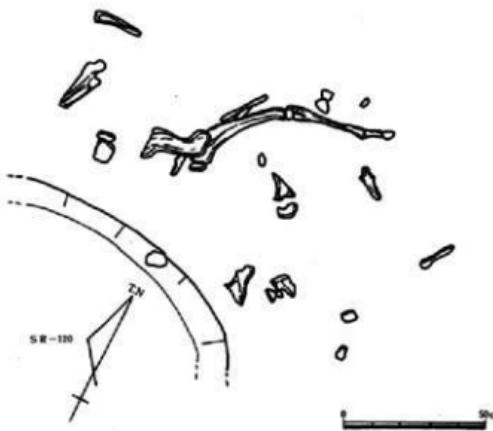


圖41 SD-004・3層內馬骨出土狀況 (1/20)



図42 3層内馬骨出土状況（北より）

もので、遷改時に改善したか、自然に演出したものが廻地に入りこむだものであろう。

以上、墓の状態から、大溝が自然堆積で半分程埋まって窪地となつた段階(4層)で營なまれ、數年か數十年後の濁の改修により破損されたと推察される。

馬骨(図41・42) G-3グリッドの3層中、S R-120の上位で検出した。詳細は付録2)を参考されたいが、鹿児島大学農学部・西中川助教授の鑑定によると、出土しているのは馬の左前肢で上腕から中節骨までの一連のものと、懸骨・尺骨・手根骨・中手骨・基節骨等で2個体分以上の馬骨であると推定される。中手骨の最大長から、130cm程の体高を有するウマであることが想像され、現生の御崎ウマと同程度の中型馬と考えられている。

後世の攢乱によるものと考えられる。実際層位的にはこの部分のみが台状に残されており、溝改修時に人骨を破壊して墓に気付き、そのまま残したと思われる。

S R-121(図35・36-4号人骨)はH-4グリッドに存し1.31×0.76×0.42m・基底標高2.10mを測かる隅丸方形の墓壙で、南側の一部を削平されている。頭位をN-100°-Eにとる右側臥屈葬で被葬者は性別不明、熟年である。

S R-141(図37-38-7号人骨)はI-4グリッドに存し、1.24×0.50×0.32m・基底標高2.34mを測かる方形の墓壙で、南側を削平され、このため左上半部の大半が溝内に流出している。頭位をN-85°Wにとる俯臥屈葬で、被葬者は熟年男性である。

S R -119(図39・40)はS R -141の南60cm程の位置に有る0.85×0.71×0.46mを測かる円形の墓壙で、内部の頭蓋骨はS R -

141が抑制を受けた際に導出した

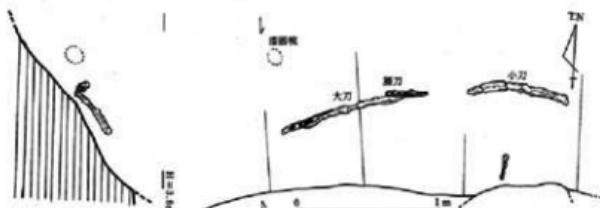


図43 SD-004内日本刀出土状況（1/40）



図44 日本刀出土状況（北より）



図45 日本刀一大刀・腰刀（北より）

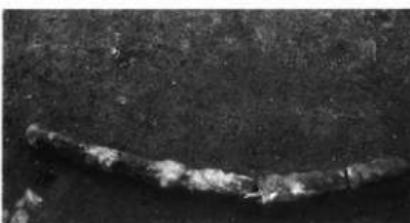


図46 日本刀一小刀（北より）

日本刀（図43～46）

大溝内のG-4グリッド、1～2層間にかけて、溝の主軸に沿って一直線に直列した状態で大刀1振・小刀1振・腰刀1振と銅製の笄2本を検出している。大刀・小刀とともに溝南側の上端から内側へ0.4～0.8m、下へ0.9～1.2mと同軸線上に位置しており、同時に処理されたものと考えられる。さらに大刀の内側50cmの地点で朱塗りの椀を2個重ねた状態で検出しておらず、刀に供するものと考えられる。ともに掘方・木箱の残存は無く、直に埋められている。

大刀は全長98cmで、黒塗りの鞘の一部が残っている。刃の両側に小柄のかわりに21.5cmの銅製笄を2本差している。体部の木葉文様が大刀の目貫と同様であり、当初からセットとして作成されたものである。大刀の下側には30cmの腰刀が重なっている。小刀は全長73cmで大刀同様黒塗りの鞘が残存している（巻頭図版）。笄は大刀に類似しているが目貫は草花文様でこれとは異なっており、類似品で腰物一揃えとして大溝の整地時に埋納されたものと思われる。

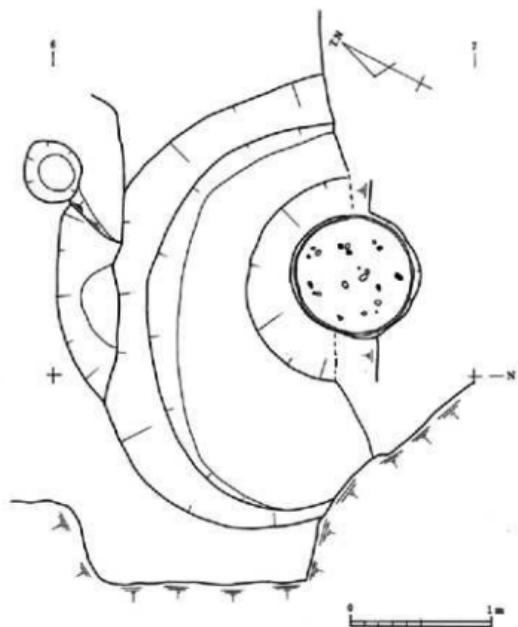


図47 SE-115実測図（1/40）



図48 SE-115（北東より）

② 井戸

井戸は平安末期～鎌倉初期で12基、13世紀前半～後半期間に廃絶されたものは4基を数える。前代のものの分布は、F～K-2～4グリッドの範囲に12基中9基が集中し群を成しており、この外側15～20mにS E-090・134・012の3基がほぼ直角にそれぞれ10.5m、16.8mの間隔で分布しており、また、090と集中部分がN-60°-E・間隔が16.5m、134と012がN-59°-Eと平行する軸線上にあり、敷地の単位を示している可能性がある。

後代ではG-5～6グリッドに3基が集中し、これの東側22.4mの位置にS E-115が分布する。011と115との軸線はN-63°-Eをとり、前代に近い数値を示している。

構造はS E-115・166(図47～51)が典型で、径2～3m前後の円形の掘り方の底にさらに0.5～1.0m前後の小穴を穿がって底を抜いた木桶を井筒として据えたもので古墳期同様これを数段重ねていたと考えられる。現在の湧水点は標高1.1m程度であるが、当時は数十cmは高かったはずで、井底は前代で大部分が1.3m代、後代で1.05～1.47mを測かる。

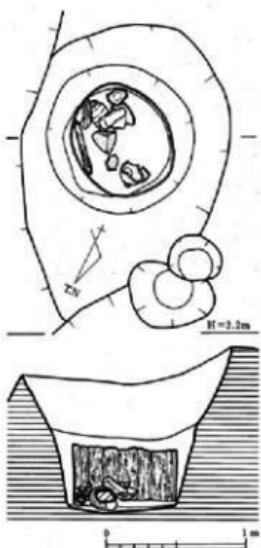


図49 SE-166実測図 (1/40)

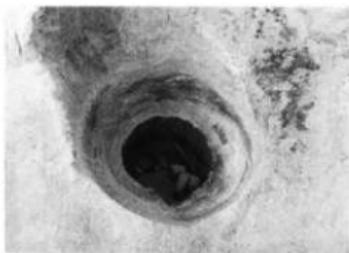


図50 SE-166 (南東より)



図51 SE-166井筒内 (南東より)

SE-115(図47・48)はN-6グリッドに存し、径3.15mの掘方に径85cmの木桶を井筒として据えている。井底は標高1.15mを測かり、2~3cm程の円礫が敷ききめられている。出土遺物より、13世紀後半~14世紀初頭にかけ廃棄されている。

SE-166(図49~51)はI-4グリッドに存し、径3.18mの掘方に径80cm程の木桶の井筒をもうけている。井底は標高0.93mを測かり、内部に完形に近い白磁碗・中国陶器C群短頭壺、四耳壺等が投棄された状態で出土している。時期は12世紀中頃~13世紀初頭。

③ 土壙

土壙は平安末期から鎌倉初期にかけて70基、13世紀前半から14世紀前半の鎌倉期末の間に廃絶されたものが11基、室町・戦国期で5基確認しており、11世紀中頃から13世紀初頭にかけて最盛期を迎えている。

調査面積の半分近くを大溝SD-004と攪乱で失なっているため厳密に判断できる状態ではないが、遺構の分布状態は鎌倉前期~末で南部に、室町戦国期に大溝北側に集中する様で、他は万遍なく分布しており偏りは無い。

戦国期のSK-122・123は土壙墓の可能性が考えられるが、ほとんどが廃棄物処理用と思われ、遺物の出土状態も遺物の小片がばらついて散在するものが大多数を占めており、今回の調

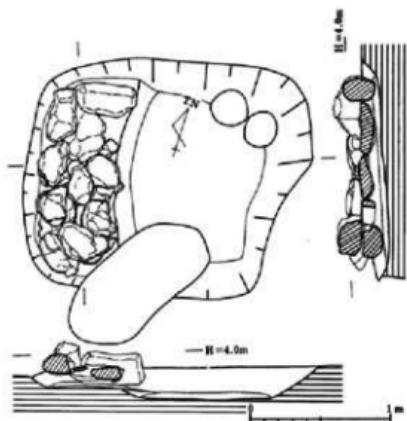


図52 SK-089実測図 (1/40)

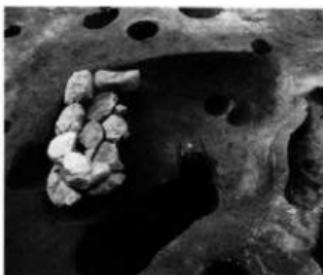


図53 SK-089 (南東より)

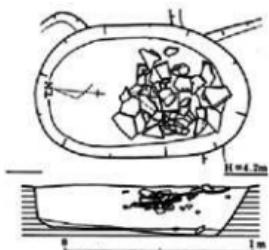


図54 SK-009実測図 (1/30)



図55 SK-009 (北東より)

查では完形に近い資料を一括投棄している例はSE-166以外確認されていない。

SK-089(図52・53)は第2面C-2グリッドに存し、 $2.22 \times 2.05 \times 0.37\text{m}$ の方形の掘方内に石室状に石を組み込んだ遺構で、東半分は擾乱で欠失している。火熱を受け赤変した石を用いており、内部には灰が薄く堆積していた。時期は12世紀中頃から13世紀初頭の間である。

SK-009(図54・55)は第1面N-3グリッドに存し、 $1.15 \times 1.04 \times 0.74\text{m}$ を測かる。北半部を掘り過ぎてしまっているが、上面に多量の平瓦片が投げ込まれている。12世紀中頃から末の間に廃棄されている。

(3) 近世・近代の遺構

第1面より近世で3基の井戸と30基の土壙・埋甕・1条の溝と、近世から近代にわたる井戸

3基と近代の土壙2基を確認している。井戸戸はS E - 078以外は瓦枠である。

S K - 005(図56～59)はG - 5グリッドに存し、長1.80×幅0.80×深0.31mを測かる不整形を呈する土壙である。長軸をN - 68° - E にとる。床面に7～8枚の薄板を敷いているが、腐朽が著しく、木質が半分泥状となって残るのみである。外側に一部角材状のものが残っており木箱を成していた可能性もある。東部に、一部を床面に接した状態で2個体分の破壊されたイギリス製白磁盤が出土しており、これは完形に復原された。口径38cm・器高12cmを測かる。

同様の型成形によるもので、口縁下外面にパルメットの装飾が鋳出されている。外底中央には銅版転写による窯印が印刷されている(図59)。他に1700年代～1780年代の伊万里製の紅皿を併せているが、銅版転写の手法から19世紀中頃以降の製品と考えられる。

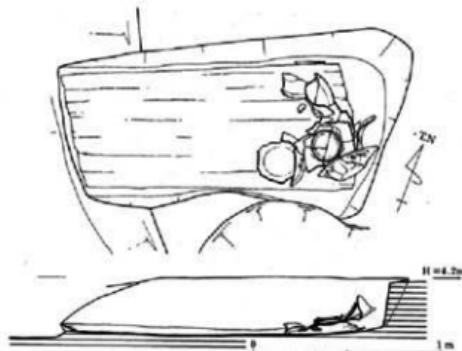


図56 SK - 005実測図 (1 / 30)



図57 SK - 005 (北西より)

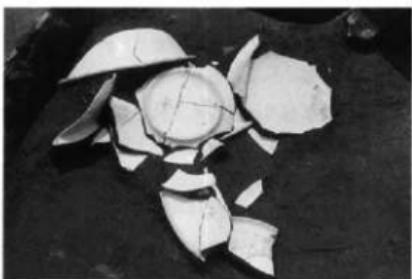


図58 イギリス白磁出土状況 (北西より)



図59 イギリス白磁窯印

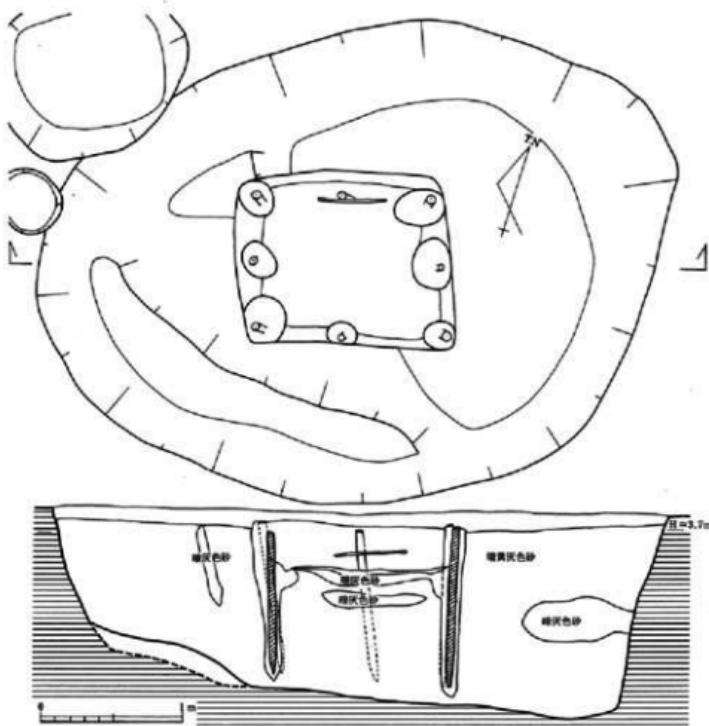


図60 SK-015実測図 (1/40)

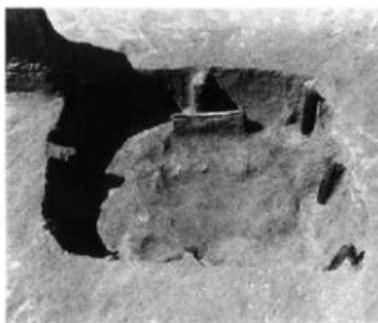


図61 SK-015内部 (南東より)

SK-015 (図60・61) はE-3グリッドに存し、主軸をN-74°-Eにとる。 $4.70 \times 3.25 \times 2.21\text{m}$ の楕円形の掘り方と $1.52 \times 1.40 \times 0.42\text{m}$ の方形の枠からなり、方形内部主体部の辺に沿って径6cm程の丸太杭が6本打ち込まれており横板と組み合わせて土留を成していたと思われる。内部には暗灰色砂が薄く堆積し底面と杭周辺には鉄分が1~2cm沈殿しており、水溜遺構と考えられる。掘方及び内部より18世紀代の伊万里染付碗等が出土している。

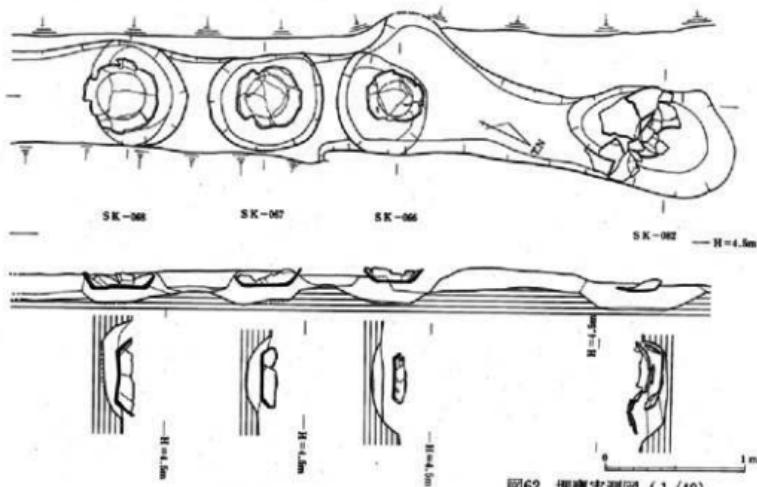


図62 埋壟実測図 (1/40)

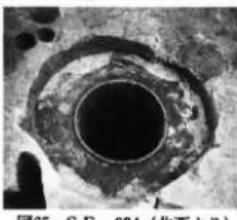
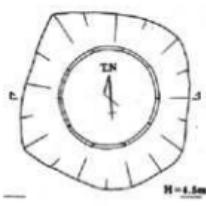


図65 SE-034 (北西より)



図63 埋壟 (南西より)

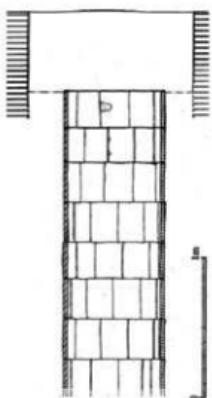


図64 SE-034実測図 (1/40)

埋壟 (図62・63) F-2~4グリッドに存し、主軸をN-19°-Wにとる $5.88 \times 0.78 \times 0.16$ mの布掘り内をさらに20cm程掘り下げ4基の瓦質壙 (SK-082・066・067・068) を据えている。壙の大部分は削平され底部が残るのみであるが、底径はそれぞれ36・25・34・40cmを測かる。東側のSK-057もこれと一連のものと思われる。内部より18・19世紀代の遺物を検出している。

瓦井戸 (図64・65) 近世から近・現代にわたる瓦井戸を5基検出している。SE-034はE-4グリッドに存し、 1.40×1.30 mの円形の掘り方内に径84cm、1段10枚の瓦で枠を形成している。8段まで確認したが、SE-087で底面が標高1.15mを測かり、よってこれ以下は当時の溝水点にあたる様で、木桶になる可能性がある。

III. まとめ

古墳～古代の遺構

第3面を中心に古墳前期布留式併行期の竪穴住居1戸・井戸1基・土壙3基を確認、5世纪代の土壙1基、6世纪後半代の溝1条、7世纪後半代の竪穴住居2戸、土壙1基、奈良前半代の土壙4基、後半代の土壙4基、平安前期の土壙を2基確認しており、比較的濃厚な分布を示しており、奈良期に一つのピークを迎える、平安前・中期は衰微している。

古代末～中世の遺構

1～3面全てにわたって108基の遺構を検出し、殊に12世纪中頃～13世纪初頭の間に廃棄された遺構は82基にのぼり、全体の48.8%を占め、異様な集中度を示している。これが13世纪前半以降15基と減少し、さらに室町・戦国期の日常生活関連の遺構は4基と激減する。中国明代、茅元儀の『武備志』日本考(天啓元～1621年成立)によると法奇無儀の癆先に「有一街 名大唐街 唐人留彼相伝 今尽為倭也」と、居留宋商人による「大唐街」という町がかつてあったと述べ、また『散木奇譚集』六に永長2(1097)年閏正月六日、大宰權師源經信が死亡した時、「博多にはべりける唐人どもあまたまうで来てとぶらひける」と記してあり、11世纪の終わりにはすでに「大唐街」形成の傾向は明らかであったと考えられており(川添昭二「古代・中世の博多」、「中世九州の政治と文化」)、この「大唐街」が仁平元(1151)年、大宰府官人五百余騎によつ

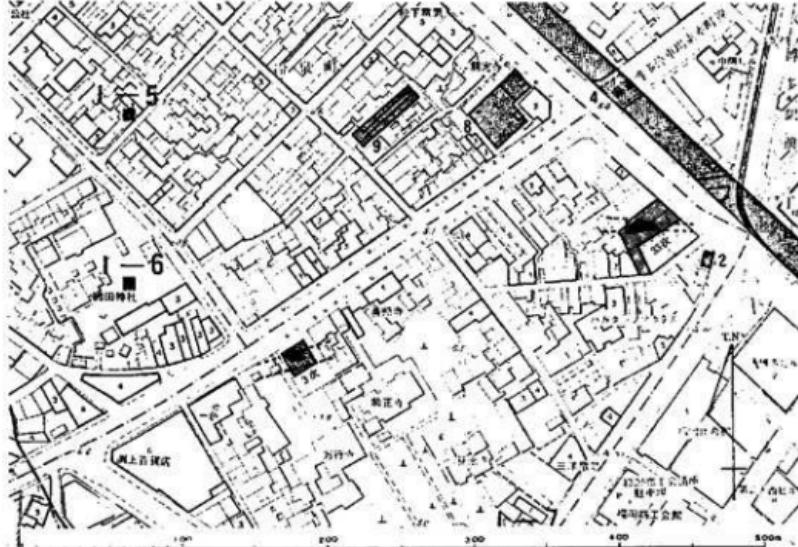


図66 博多3次(万行寺)・33次(三井)大溝位置 (1/4000)

て大追捕を受け、1600家あまりの宋人の資材が略奪されるという事件が起こっており、調査の結果はいみじくも此等の経緯に符合している。

16世紀代に掘削・改修・整地されたと思われる幅6.1~9.8m、主軸をN~92°~Eにとる大溝SD-004を検出した。遺跡群内調査例中最大規模のものである。今までの調査成果により、糸坊制によるとと思われる東西南北方向の溝は14世紀前半に廃棄され、N~30°~42°~Wの町割に移向し、16世紀代に現町割方向にと移向していく結果が得られているが、この大溝の方向は例外的である。他に3次調査(万行寺納骨堂)においてN~78°~Eと近似した方向をとる16世紀代の溝の北半分が検出されている(図66)。

貝原益軒の『筑前国続風土記』(元禄16~1703年)によると「又南の方の外郭に、横二十間餘の堀の跡ありて、瓦町の西南のすみより、辻堂の東に至る。是南方の要害の固なり。其土堤今もあり。比堀を房州堀と虎す。白杵安房守鑑康といひし人ほらせたる故なり」という。然れば元龜天正の比、始めて堀となるへし。或は其前大内家守護の時よりも、此要害有しを、白杵氏修補せしにや、いまた詳ならず」と有る。石垣普請伺下絵図(図2)には明瞭に図示されており、文化9(1812)年の古図(図4)には占屋堀として示され、明治24(1891)年『福岡市全図』(図67)にも町の境界線と重なって痕跡が伺える。調査地点はこれより北西へ150m程離れている。地図で見る限り、房州堀は現町割に沿っており、この大溝の方向とは異なっている。大溝内の出土遺物は11・12世紀代のものが7割以上を越えており、この時期の溝を完全に掘削し切って16世紀代に改削された可能性も考えられるが、この溝に大幅に削平されてもなお全量の5割近くを占める遺構の密度からして、この程度の遺物の混入も妥当と考えられるし、該期から鎌倉期にかけての井戸の分布の軸方向はN~60°~63°~Eと30°近くのずれがあり、この溝に沿っていない。今後ともに大きな課題であるが、16世紀代を示す出土遺物の時期・遺構の規模・文献中の修補の

文との一致等より、元龜2(1571)年大友氏による「房州堀」・「矢倉門」とともに、大規模防衛線整備の一貫として改削され、天正15(1587)年の太閤町割で整地された可能性が有力と思われる。

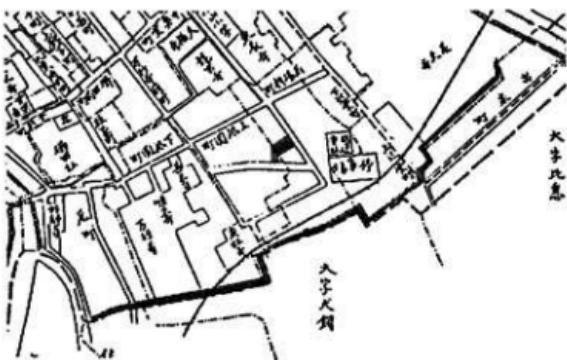


図67 「福岡市全図」明治24(1891)年 (1/10000)
アミカケは調査区位置と「房州堀」軸跡

付編(1) 博多遺跡群第33次調査出土の中世人骨

中橋孝博・永井昌文(九州大学医学部解剖第二講座)

はじめに

福岡市博多区祇園町8において、昭和61年7月から11月にかけてビル建設に伴なう発掘調査が実施され、計6体の中世人骨が出土した。当遺跡は、古墳時代前期から近世にいたる遺物、遺構を含むが、人骨は現地表下約3m、溝状の窪地に営まれた中世期の墓地から出土したものである。残念ながら骨の遺存状態が非常に悪く、その形態的特徴を十分には知り得なかったが、「博多」からはこれまでのところわずかに3体の中世人骨(中橋・永井、1986・1987)しか出土しておらず、貴重な追加資料となるものであり、以下、その知り得たところを概括しておく。

1. 出土・保存状況、所属年代

溝状遺構の埋没後の窪地に営まれた墓地から検出されたものであり、散乱人骨である6号人骨を除き全て土壤墓内より出土している。いずれも砂層中に埋められた土壤であるが、その砂がやや粗く、かなりの有機物を含んでおり、また、16世紀末頃の溝改削によってかなりの擾乱を受ける等、悪条件が重なったために骨の保存状態は極めて不良である。骨質が非常に脆弱化し、補強液等の使用にもかかわらず、取上げ後の復元も一部を除きほとんど不可能な程に亜みが著しく、細片化している。

所属年代は出土遺物の考古学的検証より16世紀の、室町時代のものと考えられている。

2. 所見

出土人骨を表1に示す。

2-1、1号人骨(女性、成~熟年)

左側を下にした側臥屈葬で、頭片の他、上、下肢、肋骨、骨盤片を認めるが、いずれも細片化している。

性別、年齢に関しては上記のような遺存状況のため正確な判定が困難であるが、わずかに原形をとどめている大腿骨片の太さからみて女性である可能性が強い。また、歯が一部かなり摩耗しており、成年の後半から熟年期にかけての人骨とみなされる。

2-2、2号人骨(男性、成年)

出土時の観察所見から、右側を下にした側臥屈葬とみなされ、実質上、部位同定が可能なのは齒のみである。

以下にその歯式を示す。

\dot{M}_3	/	/	\dot{P}_2	\dot{P}_3	\dot{C}	\dot{I}_2	\dot{I}_1		\dot{I}_1	\dot{I}_2	\dot{C}	\dot{P}_1	\dot{P}_2	/	\dot{M}_2	/
M_3	M_2	M_1	/	P_1	C	I_2	I_1	.	/	C	P_1	P_2	/	M_2	M_3	

(/ : 欠落, * : 遊離歯)

犬歯、あるいは大臼歯のサイズが比較的大きく、その計測値からみて男性である可能性が強い。また、咬合面の摩耗がかなり弱く、第3大臼歯にわずかながら摩耗が認められることから成人には達していた可能性が強いが、いずれにしても20才前後のごく若い人骨と推定される。

2-3、3号人骨（女性、成年）

ほぼ仰臥し、膝関節を強屈した姿勢で見出された。右大腿骨、胫骨、腓骨、及び右前腕骨等は搅乱を受けて失なわれている。当遺跡出土の中性人骨の中では7号人骨と共に比較的残りのいい方であるが、歪みが著しく、細片化し、頭蓋冠の一部を除いて、復元、観察は不可能であった。

性別、年齢については、まず骨盤の大坐骨切痕の開きや、頭蓋各所の筋付着部の発達度からみて、女性とみなされ、また、歯の咬耗が比較的弱く、頭蓋の主縫合がいずれも開離していることからみて、2号人骨程ではないがかなり若い成年人骨とみなされる。

観察所見として、頭蓋では上面観においてかなり頭幅の狭い特徴がうかがえ、頭長が不明ではあるが、強い長頭傾向が認められる。また上腕骨では、取上げ後の乾燥にともなう縮少を考慮に入れてもなお、かなり細く、やや扁平性の強い特徴もうかがえる。

2-4、4号人骨（性別不明、熟年）

出土時の観察所見から、右側を下にした側臥屈葬であったと推定される。保存状態が非常に悪く、頭小片の他は消失している。

上記の様な状況のため、性別の判定は不可能だが、歯片の咬合面の観察所見から、恐らくは熟年に達した遺体と思われる。

2-5、6号人骨（男性、成年）

当人骨は、搅乱を受けて溝状遺構中より散乱した状態で見出されたものであり、比較的残りのよい左大腿骨と上腕骨片を認める。

大腿骨の骨幹周は約87mmで、筆者らの保存不良骨に対する性判定法（Nakahashi and Nagai. 1986）から、男性である可能性が示唆された。

骨体が変型しているので正確な示数は得られないが、特徴として粗線の発達が弱くかなり矢状径の小さい、いわゆる柱状大腿骨とは対照的な骨幹断面型をみせている。

2-6、7号人骨（男性、熟年～）

右側を下にした、ほとんど俯臥に近い姿勢で見出された。また、搅乱を受けて、当人骨のものとみなされる頭骨はやや離れた位置に遊離した状態で検出されている。

3号人骨と共に比較的多くの全身骨が遺存しているが、変型が著しく、その形態的特徴を知

ることはできない。

性別は四肢骨片の太さから男性である可能性が示唆され、また、上顎片の歯槽部がかなり閉鎖しているので、少くとも熟年以上の、かなり高齢の人骨と推察される。

3. 総括

以上、博多遺跡群第33次調査で出土した中世人骨は、骨の遺存状況が非常に悪く、その形質状の特性を明らかにできなかったが、この遺跡における中世人の埋葬姿勢として側臥屈葬の頻度が高い点や(5例中3例、7号人骨も側臥屈葬のやや変化したものとみなすと4例が側臥屈葬で埋葬されていたこととなる)、3号人骨の頭蓋に長頭傾向が認められ、以前の出土例を合わせて、当地の中世人もまたかなりの長頭性をその共通の特徴とする点等が確認された。博多のような古い歴史をもつ町の住民が、人類学上どういう特徴をもっていたのか、その形質の時代的な変化や地域的特性を明らかにすることは、天福寺近世人の報告(中橋、1987)の中でも触れたように、色々な問題点を含む今後の重要な課題である。残念ながら今回の出土資料はその目的には不十分なものであったが、少しづつでもこうした資料蓄積の努力が続けられていくれば、いずれ大きな成果に到達することも期待できよう。

(未筆ながら、当人骨研究の機会を与えていただき、色々と御教示いただいた福岡市教育委員会の各位に深謝いたします。)

文 献

- 中橋孝博、永井昌文(1986)：博多遺跡群第26次調査出土人骨、博多VI、福岡市埋蔵文化財調査報告書、144:20-21、福岡市教育委員会
T. Nakahashi, and M. Nagai (1986) : Sex assessment of fragmentary skeletal remains.
J. Anthropol. Soc. Nippon 94: 289-305
中橋孝博、永井昌文(1987)：博多遺跡群第28次調査出土中世人骨、福岡市埋蔵文化財調査報告、147: 121-123、福岡市教育委員会
中橋孝博(1987)：福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨、人類誌、95: 89-106

表1 博多第33次調査出土中世人骨

番号	性別	年齢	埋葬姿勢	遺存状態	備考
1	(女性)	成~熟年	左側臥屈葬	ほぼ全身骨をみるが 細片化、歪み著明	
2	(男性)	(成年)	右側臥屈葬	齒他、体部骨片	
3	女性	成年	仰臥屈肢	ほぼ全身骨をみるが 細片化、歪み著明	長頭傾向
4	不明	熟年	(右側臥屈葬)	頭骨小片、他	
6	(男性)	成人	不明	左人頭骨、他	調査より散乱 人骨として出土
7	(男性)	熟年~	俯臥屈葬	ほぼ全身骨をみるが 歪み著明	5号人骨として取上げ られた頭骨と同一個体

付編(2) 博多遺跡群第33次調査出土の馬骨について

西中川 駿 (鹿児島大学農学部)

はじめに

近年、奈良、平安から中世にかけて、全国各地から馬の骨や歯の出土が報告されている。また、芝田³、直良³は繩文、弥生および古墳時代に、全国で75カ所から馬骨、歯の出土を報告しているが、これらはすべてが当時のものかは、疑問がもたれている。最近、九州では佐賀県託田西分貝塚⁵、熊本県宇土城三ノ丸跡⁶、上の原遺跡II⁷、鹿児島県麥三浦貝塚⁸から馬の骨や歯の出土が報告されている。

博多33次遺跡は、福岡市博多区祇園町8にあり、福岡市教育委員会が発掘調査を行い、16世紀の遺物の出土した遺構である。調査依頼された馬骨は、発掘当時は現形をとどめていたものもあったが、当研究室へ搬入されたときは、小骨片になったものが多く、可能な限り修復して、その形態を肉眼的、計測学的に検索し、日本在来馬のものと比較検討を行ったので、ここにその概要を報告する。

1. 出土状況と出土骨量

馬骨の出土状況は、発掘担当者の加藤氏によると、東内に貫く幅9~6m、深さ2.8mの大溝の中層で、埋葬人骨の上層から検出されたという。出土骨の総重量は、431.6gで、それらは前肢の、上腕骨1(左)、橈骨4(左2、右2)、尺骨4(2、2)、手根骨6(左)、中手骨2(1、1)、基節骨1(左)および中節骨1(左)個で、後肢は胫骨1(左)個のみであり、その他小骨片が多数みられる。橈、尺骨が左、右各2個ずつあることから少なくとも2個体以上の馬骨であることが推定される。

2. 出土骨の概要

測定可能な出土骨および日本在来馬の骨の計測値の比較は、表1に示した。

左側の前肢骨は上腕骨から中節骨まで同一個体のものである(図版Iの1~6参照)。

上腕骨は、外側を下にして、内側から圧迫された形の遺位1/2の保存骨で、その保存最大長は197.5mmで、修復された骨体中央径は38.9mmであり、これは現生のトカラウマより少し大きい。

橈骨は左2、右2個の出土があり、2個体分のものと思われる。これらの骨もすべて圧迫され、変形しており、正確な計測値を得ることは出来ない。形状は在来馬に類似している。左側の橈骨の近位端の幅×径は、63.3×42.0mmで、不完全ながらトカラウマより大きな値を示している。

尺骨の左側の1例は、肘頭を欠如し、滑車切痕や橈骨との関節面を有するもので、滑車切痕の幅は19.7mmでトカラウマより大きい。他の3例は変形や欠損の多い標本である。

手根骨は、左側のみで、橈側、尺側、中間、第2、3、4手根骨で、中間や第3手根骨はほぼ完全な状態で出土しており、それらの幅×径は、それぞれ25.7×31.4、32.6×35.1mmである。

中手骨は、骨体の一部破損したものと(左)、遠位端の滑車の一部(右)の2標本で、左側のものの修復した最大長は214.4mmであり、これより林田らの方法で体高を推定すると、130cmの大きさであったことがうかがわれる。他の部位の計測値は表1に示した。

基節骨は、前肢の左側1個で、やはり内側が圧迫され、形は変形しており、それら計測値は参考値として表1に示した。

中節骨は、前記基節骨と関節するもので、やはり変形している。

脛骨は唯一の後肢の出土骨で、遠位端関節部のみがみられ、幾分変形しているが、その幅と径は55.2×30.7mmで、これらはトカラウマ(61.0×52.2)より小さい。

3. 考察

博多33次遺跡出土の馬骨は、2個体分の骨で、中手骨の最大長から、体高を推定すると、130cm位を有するウマであったことが想像され、これは前記の託田西分貝塚124cm、宇土城三ノ丸跡105~125cm、麦三浦貝塚120cmよりも大きく、また、現生の小型馬であるトカラウマ(雄114.9、雌114.5)より大きく、御崎ウマ(雄134.6、雌130.9)と同じ大きさの中型馬に属するウマであったことが考えられる。また、頭蓋や寛骨の出土がないので、年齢や性別を推定することが出来なかったが、骨端の閉鎖などから成獣であることは明らかである。

当時の馬は、すでに史実が示すように、乗馬や戦力として利用されていたと思われ、刀傷などがないことから、食用としたのではなく、死後埋葬されたものと考えられる。

4.まとめ

博多33次遺跡出土の馬骨について調査した。

- 1) 馬骨の総重量は431.6gで、それらは上腕骨、橈、尺骨、手根骨、中手骨、基節骨、未節骨および脛骨である。
- 2) 中手骨の最大長から体高を推定すると、130cm位で、現生の御崎ウマと同じ中型馬に属するものである。

参考文献

1. 林田重幸：日本在来馬の系統に関する研究、1-180、中央競馬会、東京(1978)
2. 林田重幸ら：馬における骨長より体高の推定法、鹿大農学術報告、6、146-156(1957)
3. 直良信夫：日本および東南アジア観見の馬歯、馬骨、1-174、中央競馬会、東京(1970)
4. 西中川駿：宇土城三ノ丸跡出土の動物骨について、宇土城三ノ丸跡、71-82、宇土市教育委員会(1982)
5. ハラ：託田西分貝塚出土の自然遺物、託田西分貝塚、74-79、千代田町教育委員会(1983)
6. ハラ：塙原古墳群(上の原支群)出土の馬歯について、上の原遺跡II、97-102、熊本県文化財保護協会(1984)
7. ハラ：古代遺跡出土の動物骨に関する研究 VI 鹿児島県志布志貝塚出土骨の概要、鹿大農学術報告 37、105-113(1987)
8. 芝田清吾：日本古代家畜史の研究、1-248、学術出版社、東京(1969)

表1 出土骨および現代馬の骨の計測値

(mm)

	上腕骨	標 骨		中 手 骨				基 節 骨(前)		
		骨体 中央径	近位 端 幅 径	最大長 幅	近位 端 幅 径	遠位 端 幅 径	最大長	近位 端 幅 径		
博多 33次	38.9	L63.3	42.0	214.1	39.5	31.9	39.3	31.9	78.3	41.1
		R49.2	33.6							31.2
		L63.9	29.9							
宇土城 三ノ丸第				206.5	42.8	29.0	43.9	33.4		
トカラ ♂	38.6±1.3	65.3±0.9	41.5±2.2	201.9±7.5	43.8±1.3	30.1±1.1	43.1±2.1	32.5±0.5	77.2±0.7	49.0±0.2
ウマ ♀	33.6±2.2	61.5±2.7	39.7±2.2	199.3±5.5	42.2±2.2	29.5±1.5	41.1±2.2	31.5±1.3	75.5±2.6	45.7±0.2
御崎 ♂	42.8±0.6	77.3±2.4	45.4±2.9	209.0±6.1	49.4±0.7	33.9±2.4	45.6±1.1	34.2±1.2	80.7±3.3	52.0±2.3
ウマ ♀	43.9±2.3	79.7±1.8	46.3±2.3	218.5±9.6	48.9±1.8	33.1±1.6	45.9±0.9	34.4±1.1	82.7±1.3	50.8±2.1
サラブレ ♂	49.7±3.1	89.7±4.7	55.5±4.7	266.1	59.8±3.2	41.2±2.1	59.3±2.8	43.5±1.4	103.8±5.3	64.1±3.5
ワトソン ♀	47.9±2.3	86.4±3.9	56.9±1.7	268.8±9.7	59.0±2.1	39.7±1.6	57.2±2.5	42.1±1.7	100.4±0.8	59.8±1.4
										42.0±1.8

— 不完全骨を意味する。

図版の説明

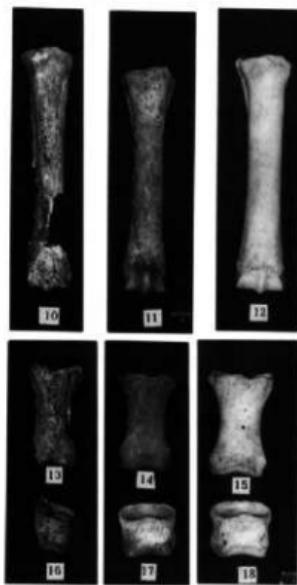
1～6：ウマの出土骨(左側)、7、10、13、16：出土骨、5、11、14、17：トカラウマ、

9、12、15、18：御崎ウマ

1．上腕骨、2．標骨、尺骨、3．手根骨、4．中手骨、5．基節骨(前)、6．中節骨(前)

7、8、9 機、尺骨(左)、10、11、12、中手骨(左)、13、14、15、基節骨(左)、16、17、18、中節骨(左)

図版 I



(注) ●時期は土葬業(大半が専門的)を中心に他の供養業・切り合い業界で決たし、専業営利を示している。
 ●現段で、葬業は上層に階級の差で順位を争うが、それは「身元」による階級・下階級×深浅を示している。

遺構 No.	アリット	地圖	断面(C=世紀)	長辺×短辺×深さ(底面厚さ) m	出土遺物	土 墓	土壠標・墓・坑名
SK-040	E-6	1	12C前半～中期	1.50+σ×0.95+σ×0.55(3.60)	白磁(底面・V型) 片、丸瓶、鏡	中国漆器(黒) 漆器(漆、灰漆、P)	瓦器(瓦) 上漆器(漆、 漆器(漆、灰漆、P)
SK-041	E-5	1	12C後半～13C初	2.35+σ×2.07+σ×0.49(2.65)	白磁(底面・V型) 中国漆器(黒、灰) 漆器(漆、灰漆、内側漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆)	漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆)	漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆)
SK-042	E-5	1	12C後半～中期	2.30+σ×1.55+σ×0.34(3.50)	白磁(底面V型) 平底(底面V型) 石器、灰	漆器(漆、灰漆、P) 漆器(漆、灰漆、P)	瓦器(瓦) 漆器(漆、灰漆、P)
SK-043	E-5	1	19C初～盛末	2.12×1.25×0.57(3.02)	白磁(底面V型) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆)	漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆)	漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆)
SK-044	G-3	1	近世	2.37×0.35×0.22(3.98)	白磁(底面V型) 内胆(灰、小口瓶、漆) 漆器(漆、灰漆)	古日服(灰) 瓦器土器 漆器(漆、灰漆)	漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆)
SK-045	G-3	1	近世	2.37+σ×0.79+σ×0.25(3.95)			
SK-046	G-4	1	18C～19C	2.22+σ×0.86+σ×0.41(3.82)	白磁(底面V型・V字形) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆)	漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆)	漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆)
SK-047	H-3	1	12C後半～13C初	1.33×1.05×0.30(3.95)	白磁(底面V型) 漆器(漆、灰漆)	漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆)	漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆)
SK-048	H-3	1	12C後半～13C初	2.13×1.90×0.38(3.90)	白磁(底面V型) 漆器(漆、灰漆)	漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆)	漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆)
SK-049	H-4	1	17C末～18C初	2.06+σ×0.81+σ×0.27(3.93)	白磁(底面V型) 漆器(漆、灰漆)	漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆)	漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆)
SK-050	H-5	1	19C初～暮末	1.00+σ×0.63+σ×0.46(3.48)	白磁(底面V型) 漆器(漆、灰漆)	漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆)	漆器(漆、灰漆) 漆器(漆、灰漆)
SK-051	H-5	1	近世	1.00×0.32×0.35(3.87)			

通 築 号	ダリット	地盤面	地盤面 標高(C=世界基準)	長さ×幅さ×深さ(実測高さ)m	出 土 貨 物		土壌物・量・方法 (m ² ×高さ)cm
					白磁(陶、瓦) 土器(灰、灰) 骨器(同安陶1種)	中国伝陶器(青) 中国伝陶器(白) 中国伝陶器(小口瓶、碗)	
S K-065	N-2	1	12C中頃-13C前	1.33+ε×0.37+ε×0.34(3.72)	白磁(陶、瓦) 土器(灰、灰)	骨器(同安陶1種)	中国伝陶器(白) 中国伝陶器(青)
S K-066	F-3	1	18C-19C		白磁(陶、瓦) 食器(同安陶1種、同安灰) 石製品(灰)	中国伝陶器(小口瓶、碗) 中国伝陶器(灰) 瓦質土器(灰)	中国伝陶器 土器等
S K-067	F-3	1	18C-19C		「鉢(陶)」「口・脇V-底鉢」 瓦質土器(灰) 瓦質土器(灰、灰、灰) 瓦質土器(灰)	「鉢(陶)」「口・脇V-底鉢」 瓦質土器(灰) 瓦質土器(灰、灰) 瓦質土器(灰)	中国 土器等
S K-068	F-4	1	18C-19C		瓦質土器(灰) 瓦質土器(灰、灰、灰) 瓦質土器(灰)	瓦質土器(灰) 瓦質土器(灰、灰、灰)	土器等
S K-069	G-1	1	近世	1.40×0.53+ε×0.22(3.87)	白磁(陶) 瓦質土器(灰) 瓦質土器(灰)	中国伝陶器(底鉢) 中国伝陶器(底鉢) 瓦質土器(灰)	中国伝陶器 瓦質土器(灰)
S K-070	G-2	1	近世	1.75+ε×1.47+ε×0.46(3.50)	「鉢(陶)」「口・脇V-底鉢」 瓦質土器(灰、灰) 瓦質土器(灰)	「鉢(陶)」「口・脇V-底鉢」 瓦質土器(灰、灰) 瓦質土器(灰)	竹 中国伝陶器(底鉢) 瓦質土器(灰)
S K-071	G-2	1	近世	1.36+ε×0.83+ε×0.13(3.56)	白磁(陶) 瓦質土器(灰、灰) 瓦質土器(灰)	「鉢(陶)」「口・脇V-底鉢」 瓦質土器(灰、灰) 瓦質土器(灰)	中国伝陶器(底鉢) 瓦質土器(灰)
S K-072	G-2	1	近世	2.06×1.50+ε×0.21(4.01)	「鉢(陶)」「口・脇V-底鉢」 瓦質土器(灰、灰)	「鉢(陶)」「口・脇V-底鉢」 瓦質土器(灰、灰)	中国伝陶器 瓦質土器(灰)
S K-073	H-2	1	近世	1.57×1.17×0.39(3.84)	白磁(陶)「N・V-底鉢」 瓦質土器A・B・C(灰)	「鉢(陶)」「小口瓶」 瓦質土器(灰、灰) 自然物(灰水苔)	中国伝陶器 瓦質土器(灰) 瓦質土器(灰)
S K-074	H-2	1	19C初~盛末	25.2×1.85×0.96(3.37)	「鉢(陶)」「口・脇V-底鉢」 中国伝陶器(灰) 瓦質土器(灰、灰) 瓦質土器(灰、灰)	「鉢(陶)」「口・脇V-底鉢」 中国伝陶器(灰) 瓦質土器(灰、灰) 瓦質土器(灰、灰)	中国伝陶器 瓦質土器(灰) 瓦質土器(灰)
S K-075	H-2	1	12C中頃-13C前	10.4+ε×0.46+ε×0.63(3.90)	白磁(陶) 瓦質土器(灰)	白磁(陶) 瓦質土器(灰)	瓦質土器(灰) 瓦質土器(灰)

遺 墓 No.	ダリット	地圖	時期 (C = 世紀)	長さ×幅 (cm)	出土 物	土面標 (cm)
S K-116	H-1	2	11C 中頃	1.77×0.75+φ×0.48(3.5)	白磁 (W-V 領) 背面 (深鉢形) 磁器盤 (外側) 磁器盤 (内側) 陶器器 (外側) 陶器器 (内側) 土器片 (H、火鉢底) 鍋	土面標・塗・竹縄
S K-117	H-2	2	11C-12C 初	1.32×0.75+φ×0.18(3.70)	中国青磁盤 (外側) 中国青磁盤 (内側) 陶器器 (外側) 陶器器 (内側) 土器片 (H、火鉢底) 鍋	土面標・塗・竹縄
S K-118	I-2	2	11C 中頃-12C 初	1.32+φ×0.74+φ×0.13(3.71)	白磁 (W-V 領, 平底直口盤) 中国青磁 (外側) 陶器器 (外側) H、高足杯 (高足)	土面標・塗・竹縄
S K-119	I-4	16C		0.35×0.71×0.46(2.22)	L型 (W-V 領) 中国青磁盤 (外側) 陶器器 (外側) 陶器器 (内側)	土面標 (塗)
S K-120	G-3	2	16C	1.51×1.00×1.15(1.61)	白磁 (W-V 領) 中国青磁 (外側) 陶器器 (外側) 陶器器 (内側) 陶器器 (外側) 陶器器 (内側) 土器片 (H、火鉢底)	土面標 (塗)
S K-121	H-4	2	16C	1.31×0.75×0.42(2.10)	白磁 (W-V 領) 中国青磁器 (茶碗) 陶器器 (外側) 陶器器 (内側) 土器片 (H、火鉢底)	土面標 (塗)
S K-122	F-2	2	16C	1.07×0.68×0.45(1.82)	白磁 (W-V 領) 中国青磁 (外側) 陶器器 (外側) 陶器器 (内側) 土器片 (H、火鉢底)	土面標 (塗)
S K-123	F-2	2	14C-15C	1.67×0.51×0.46(2.22)	白磁 (W-V 領) 中国青磁 (外側) 陶器器 (外側) 陶器器 (内側) 土器片 (H、火鉢底)	土面標 (塗)
S K-124	L-1	2	11C 後-13C 初	1.24×1.06×1.22(2.55)	白磁 (W-V 領) 中国青磁 (外側) 陶器器 (外側) 陶器器 (内側) 土器片 (H、火鉢底)	土面標 (塗)
S K-125	E-1	1	11C 中頃-13C 初	1.04+φ×1.00×0.35(3.82)	白磁 (W-V 領) 中国青磁 (外側) 陶器器 (外側) 陶器器 (内側) 土器片 (H、火鉢底)	土面標 (塗)
S K-126	N-2	2	11C 中頃-13C 初	1.04+φ×1.00×0.72(3.00)	白磁 (W-V 領) 中国青磁 (外側) 陶器器 (外側) 陶器器 (内側) 土器片 (H、火鉢底)	土面標 (塗)
S K-127	K-2	2	11C 後半-13C 初	1.70+φ×1.40×0.37(2.85)	白磁 (W-V 領) 中国青磁 (外側) 陶器器 (外側) 陶器器 (内側) 土器片 (H、火鉢底)	土面標 (塗)
S K-128	K-3	2	11C 中頃-13C 初	1.83×1.17×1.03(2.90)	白磁 (W-V 領) 中国青磁 (外側) 陶器器 (外側) 陶器器 (内側) 土器片 (H、火鉢底)	土面標 (塗)
S K-129	G-1	2	11C 中頃-13C 初	1.23×0.93+φ×0.35(2.51)	白磁 (W-V 領) 中国青磁 (外側) 陶器器 (外側) 陶器器 (内側) 土器片 (H、火鉢底)	土面標 (塗)

遺 墓 No	グリット	地盤	時期	時期 (C = 氏紀)	長さ×幅×高さ (深さ) (mm)	出 土 物 品	土壌 (日本語×英語)
S E-130	G-3	3	12C 中頃 - 13C 初	0.80×0.77×0.40(1.13) 1.73×0.18×0.51(1.55)	白磁 (輪V・VI型, 平底盤O・VI型, 斧, 合) 青磁 (同平安期以前) 直口瓶 1脚, 中国青磁 (盤, 直口瓶, 鋼, 銅器, 銀器, 銅鏡, 銀鏡, 銀) 金銀 器 (銀, 銀, 高台), 五互型 土器等 (Ⅲ) 石製品 (石器, 石器)	Ⅲ8.8×1.1	
S E-131	G-3	3	12C 4脚 - 13C 初	0.74×0.72×0.50(1.55) 1.07×0.93×0.67(1.78)	白磁 (輪V・II型, 斧) 青白磁 (合) 中国青磁 (盤, 四互型, 斧) 四互型陶器 (Ⅳ) 新出器 (盤, 斧, 直口瓶, 五互型) 土器等 (Ⅲ) 石製品 (石器, 石器)	Ⅲ8.8×1.1	
S E-132	H-3	3	12C 4脚 - 13C 初	0.68×0.49×0.51(1.30) 1.59×0.85×0.64(1.85)	白磁 (碗) 青磁 (合) 中国青磁 (盤, 四互型, 斧) 土器等 (Ⅲ) 金銀器 (スラグ)	Ⅲ8.8×1.1	
S E-133	H-3	3	12C 中頃 - 13C 初	0.55×0.47×0.25(1.30) 1.60×0.12×0.37(1.86)	白磁 (輪V・VI型, 平底盤O・VI型, 斧) 青白磁 (合) 中国青磁 (盤, 直口瓶, 銀器, 銀鏡, 銀) 金銀器 (スラグ, 銀, 銀, 高台)	Ⅲ8.8×1.1	
S E-134	A-6	3	12C 中頃 - 13C 初	2.32×1.90×0×?	白磁 (輪V・VI型, 平底盤O・VI型, 斧) 中国青磁 (盤, 直口瓶, 銀器, 銀鏡, 銀) 金銀器 (スラグ, 銀, 銀, 高台)	Ⅲ8.8×1.1	
S K-135	B-6	3	12C 中頃 - 13C 初	2.05×1.43×0.80(1.71)	白磁 (輪V・VI型, 斧) 青白磁 (合) 中国青磁 (盤, 直口瓶, 銀器, 銀) 金銀器 (スラグ)	Ⅲ8.8×1.1	
S K-136	B-5	3	12C 中頃 - 13C 初	1.23×1.02×0×0.48(2.11)	白磁 (輪III期) 和歌器 (J, J) 玉器, 彩色土器B類 (W) 土器等 (直, 环, 镜, 瓷器)	Ⅲ8.8×1.1	
S K-137	A-6	3	11C 中頃 - 12C 初	0.50×0.35×0.52(2.58)	白磁 (輪III期) 和歌器 (J, J) 玉器, 彩色土器B類 (W) 土器等 (直, 环, 镜, 瓷器)	Ⅲ8.8×1.1	
S K-138	E-2	2	15C 後期	1.69×0.57×0.17(1.47)	白磁 (輪V・VI型, 斧) 青白磁 (印加器) 中国青磁 (盤, 直口瓶, 銀器, 銀) 金銀器 (スラグ)	Ⅲ8.8×1.1	
S K-139	C-6	2	12C 後半 - 13C 初	1.96×1.90×0.63(3.20)	白磁 (輪V・VI型, 斧) 中国青磁 (盤, 直口瓶, 銀器, 銀) 金銀器 (スラグ)	Ⅲ8.8×1.1	
S K-140	J-2	3	古墳前期	1.50+e×1.60×0.43(2.91)	白磁 (直) 土器等 (直, 环) 石製品 (石子)	Ⅲ8.8×1.1	
S R-141	I-4	3	16C	1.21×0.50+e×0.32(2.34)			
S E-142	E-4	3	古墳前期	0.38×0.33×0.30(1.47) 4.58×3.12×e×2.21(2.09)	1脚器 (直, 高环, 石器, 铜)		
S K-143	B-3	3	9C 前半	1.25+e×0.87×0.27(3.05)	銀器等 (直) 土器等 (直, 环, Ⅲ)		
S K-144	B-4	3	古墳前期	1.25×0.55×0.36(3.00)	土器等 (直), 环, 土器		
S K-145	M-3	3	8C 後半	1.66×1.30+e×0.47(3.06)	銀器等 (直, 直) 土器等 (直, 直)		

地質 No.	グリット	種類	時期 (C = 世纪)	出 土 物		土高 (cm) × 幅 (cm)
				長辺×短辺 (mm)	厚さ (mm)	
S K-166	L-3	3	8C後半	1.34×1.34×0.70(2.88)	網目器 (H, 瓦)	土輪器 (赤, 黑, 灰) 石製品 (磨石)
S D-147	K-3	3	6C後半	3.04×4.0×0.57+φ×0.29(3.30)	網目器 (H, 瓦)	
S K-148	J-1	3	古墳前期	2.90×1.42×0.82(2.32)	(瓦) (瓦)	網目器 (H, 瓦) 高台 (H, 瓦) 自然焼物 (瓦)
S K-149	I-2	3	9C	1.52×1.07×0.48(2.82)	中筒埴造瓦 (灰)	網目器 (H, 瓦) 土輪器 (黑, 灰) 石製品 (浮子)
S K-150	H-1	3	5C初	1.12×0.86×φ×0.32(2.84)	土輪器 (灰)	内窓埴造
S E-151	H-3	3	12C中頃～13C初	2.12×1.56×1.51+φ(1.84~e)	白磁 (H, 瓶) (伊万里) (四脚) (四脚) (瓦)	土輪器 (灰) 四脚 (瓦)
S K-152	I-3	3	12C中頃～13C初	1.78×0.97×φ×0.79(2.40)	(瓦) (瓦) (瓦)	中國燒陶器 (灰, 瓦) 細燒器 (灰) 瓦
S C-153	B-3	3	7C後半	4.50×3.56×0.55(2.33)	網目器 (灰, 瓦) (瓦, 瓦, 瓦)	土輪器 (黑, 灰, 灰) 金輪器 (灰)
S C-154	B-4~5	3	古墳前期	5.60×3.22×φ×0.54(2.71)	白磁 (瓦) (瓦)	土輪器 (灰, 瓦) (瓦)
S K-155	H-5	3	8C前半～中頃	1.80×φ×1.57+φ×0.29(3.03)	網目器 (灰)	土輪器
S K-156	G-7	3	8C	1.38×0.42×φ×0.61(2.95)	網目器 (灰)	土輪器 (灰, 灰, 灰)
S K-157	F-6	3	8C前半～中頃	2.43×φ×0.32+φ×0.71(2.68)	瓦 (瓦) (瓦) (瓦) (瓦) (瓦) (瓦)	網目器 (伊万里) (青花) (小口瓶, 盆, 盆, 盆, 盆, 盆) 全高器 (瓦)
S K-158	F-4	3	8C前半～中頃	3.20×φ×1.60+φ×0.47(2.93)	瓦 (瓦) (瓦) (瓦) (瓦) (瓦)	土輪器 (灰, 灰, 灰, 灰) 石製品 (灰)
S K-159	D-5	3	8C後半	1.14×0.95+φ×0.44(2.86)	網目器 (灰)	土輪器 (灰, 灰)
S K-160	E-4	3	8C後半	3.30+φ×1.63+φ×0.54(2.81)	網目器 (瓦, 瓦)	土輪器 (瓦, 灰, 灰, 灰, 灰)
S C-161	D-5	3	7C後半	4.14×3.12×0.49(2.75)	青磁 (瓦)	中國燒陶器 (灰) 細燒器 (灰, 灰, 灰)
S K-162	E-4	3		1.63×1.14×0.51(2.84)	土輪器 (灰, 灰, 灰)	
S K-163	C-3	3	7C後半～末	0.45+φ×0.87×0.63(2.94)	網目器 (瓦, 瓦)	土輪器 (灰, 灰, 灰)
S K-164	C-3	3	8C前半～中頃	1.32×0.78×0.40(2.88)	土輪器 (灰, 灰, 灰)	
S K-165	C-4	3	12C前半～中頃	1.25×1.15×0.50(2.74)	白磁 (瓦) (瓦) (瓦) (瓦) (瓦) (瓦) (瓦) (瓦)	中國燒陶器 (灰, 灰, 灰, 灰, 灰, 灰, 灰, 灰) 石製品 (灰) (灰) (灰) (灰) (灰) (灰) (灰) (灰) 全高器

博多 11

— 博多遺跡群第33次調査報告 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書第176集

昭和63年3月31日

発 行：福岡市教育委員会
福岡市中央区大名2-10-29

印 刷：株式会社 チューエツ
